

放送人の会

No.82

2018.11.16

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉
菅野高至 (HP担当)、逸見京子、前川英樹、松尾羊一編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、
事務局 千葉邦彦 須斎恵美子

映像技術はここまで来ているのだが

〜4K番組制作の現場から〜

放送人の会 会長 今野 勉

日韓中テレビ制作者フォーラム光州大会の報告をする予定だったが、出発の前日に体調を崩して参加できなかった。腹部の激痛で救急車のお世話になってしまった。そのいきさつは私事に属するので省かせていただくとして、急病が4K番組の制作途中で起こったことでもあるので、その制作現場で体験しつつある技術の進歩ということについて、ご報告することでお許しいただきたい。

撮影現場に4Kモニターがない

4K番組だから、もちろんカメラは4K仕様である。が、現場には通常の2Kのモニターしかない。4K映像は現状の2Kに比べて格段に情報量が多いので、モニターを4Kにするとも費用も格段に高くなるし、機動性も失われるので、というのが理由のようだ。

ではどうやって撮影した映像が4Kとしてきちんと撮れているのかを確認するか、という点、ビデオ・エンジニアが、記録された4Kの情報データを確認する、ということでもOKかどうか決めるのだ。

しかし、あとで映像を再生してみて、意図したような画調になっていないと解ったらどうするのか、と誰しも思うところだが答えはこうだ。

4Kの映像データはあとでどのようにも加工、調整が可能なので、意図していた映像にもそれ以外の映像にも再生できる。

オフライン編集も2Kだ

というわけで、撮影中は一度も4K映像を見ることはできなかったのだが(今回は、1月から9月までの撮影だったので9ヶ月間!)ではオフラインの編集は4Kでやるのかというと、そうではないのだ。情報量の多い4Kの編集は、装置がまだない、というよりは、情報量が多すぎて編集に多くの時間がかかってしまうので、オフラインの編集は、4Kを2Kに変換して2Kで行うと、なっているのだ。合理的であり経済的ではあるが、

ここで依然としてダイレクターは意図した映像を選んでいくのかどうか解らないのだ。内心の慰めはこうだ。あとで自分の意図通りに調整してもらえばいいのだし、意図した以上の映像にすることもできるかもしれない…。

この辺で私は、4Kカメラについて誤解していたことに気づく。4Kカメラは超高精細映像を記録することができるのだから、暗部も2Kよりよく撮れるはずだと。実際は、4Kカメラだって、光が来なければ映らないのは2Kと同じなのだ。

今回、星空がよく撮れていたのは、4Kだから、というよりは、長時間露出による高感度撮影のお蔭なのだ、と気づいたのだ。

もう一つ、気づかされたことがある。4K番組は、既存の2K映像を、利用できない、ということである。記録された2Kを4Kにすることはできない。しかし、2Kでしか残

っていない映像を使わなければならない必要に迫られた時、どうすればいいのか。

今回の例でいうと、蒸気機関車にひかれた夜汽車の映像である。今イベントとして走っている夜汽車はあるようだが、時間的にも費用的にも4Kで撮影できる余裕はない。

苦肉の策として、既存の映像を2Kのモニターに記録映像として写し、それを4Kカメラで撮影することで、しのいだ。

ようやく4K映像に直面した

10月になって、2Kのオフライン編集済みの映像が4Kに転換され、色調の調整が終わった。ようやく4K映像に直面することになった。転換(コンフォーマット)に2日間、色調の調整(グレーディング)に3日間かかった。

つまり、2K番組の場合、オフライン編集が終われば、すぐ番組の全体映像を見ることができるようだが、4K番組の場合、コンフォーマットとグレーディングの時間が必要となる。技術面の費用が増えるということだ。制作費全体にかかわる問題である。

感じたこと

4Kの映像はたしかにきれいだ。それは制作者にとっても視聴者にとっても嬉しいことだ。

映像技術はここまで来ているのだが、それが全体的に制作全体にプラスに働いているかどうか、これから問われることになる。新しい制作体制と制作者が必要とされているのである。映像はきれいになったが、内容がそれにともなっていない、と言われたいために。

2018日韓中テレビ

制作者フォーラム

日時・10月21日(日)〜24日(水)
場所・韓国・光州広域市

【フォーラム日程】

10月21日

16時 ホテル(ホリデイ・イン光州) **チェ
ックイン**

16時半 **日韓中組織委員会**

(金大中コンベンションセンター・1階多
目的ホール・VIPルーム)

17時 **閉会式**

司会 **安琇榮**

開会の辞 **柳池烈**韓国PD連合会長

歓迎の辞 **李庸燮**光州広域市市長

参加の辞 **高健**中国テレビ芸術家協会第一

秘書

参加の辞 **放送人の会副会長 前川英樹**

—日本の放送人の会副会長の前川です。

会長の今野が、昨日から急に体調を崩してし

まい、私が代わりにご挨拶申し上げます。

まず、「日韓中テレビ制作者フォーラム」光州

大会の開催に努力された韓国PD連合の皆の

ご努力に敬意を表します。

さて、今大会のテーマは、「より良い共同体つ

くりに向けた市民運動」です。

韓国の皆さんが、今回の光州大会のこのテー

マを提案する際に、ここに込められた熱い思

いを私たちに受け止めています。そのこ

とを私は、準備会議の際訪れた光州事件の歴

史的遺産の展示を見ることで理解したので

もちろん、共同体にも市民運動にも、多様な
形があります。

大事なことは、私たちの生活は多くの人たち

との連携と会話がなければ成立しないという

ことであり、またそれによって造られる社会

こそ人々の共同性そのものだと思います。

人は一人では生きて行けず、歴史は人々の共

同体の形成との記録でもあります。その歴史

の中には、共同体の崩壊も含まれます。共同

体が壊れた時、そこに貧困も差別も暴力も生

まれます。

こうした歴史を記録として残すことは、テレ

ビの極めて重要な仕事です。テレビはより多

くの人々に情報を提供するという社会的役割

を担いビジネスを成立させています。それと

同時に、歴史を「記録」するを通して歴史

史と文化に参加することが出来ます。

今回の「日韓中テレビ制作者フォーラム」光

州大会が、日韓中各国でテレビが歴史と文化

にどのように参加しているか、という役割を

明らかにし、各国の共通性と独自性をお互い

に認識することで、それぞれに新たなテレビ

の可能性を見出すことを期待したいと思いま

す。

最後に会長の今野から、「本フォーラムの成

功を心より期待している」というメッセージ

を御伝えしてご挨拶いたします。—

17時半 **作視聴討論 1**

(1階多目的ホール)

韓国ドキュメンタリーKBSスペシャル

三代「延辺娘の東京定着記」

制作者 **李志云**

セッション司会者 **ソン・ヒョンチョル**

19・20 **歓迎晩餐会**

(ホリデイ・イン光州ホテル)

10月22日

9時 **作視聴討論 2**

(1階多目的ホール)

日本ドラマ「アンナチュラル」

制作者 **新井順子、大西あゆ子**

10時半 **作視聴討論 3**

中国エンターテインメント「天工開物—古

代の秘法を探す旅」

制作者 **李明、楊興華**

11・50 **記念写真撮影**

12・10 **昼食**

13時半 **作視聴討論 4**

日本ドキュメンタリー「里山のふところ」

生きるマンマ、おかわり！」

制作者 **福嶋良章**

15時 **作視聴討論 5**

韓国ドラマ「先にキスからしましょう

か？」

制作者 **孫正鉉**

16・20 **観光と夕食**(光州楊林文化村)

10月23日

9時 **セミナー**

「より良い共同体づくりのためのメディア

の役割について」MCNを中心に」

司会 **洪景洙、高贊洙**

討論者 **権五祥、丘凡峻**

10・20 **作視聴討論 6**

中国ドキュメンタリー「人生一串」

制作者 **朱賢亮、陳英傑**

司会 **洪昌郁**

11・40 **観光と昼食**(光州ビエンナーレ展

示館)

14時半 **作視聴討論 7**

韓国エンターテインメント「ま塩」

制作者 **徐賢**

16時 **作視聴討論 8**

日本エンターテインメント「プラタモリ

#74倉敷」

制作者 **中村貴志**

17時半 **作視聴討論 9**

中国ドラマ「狩場」

制作者 **姜偉**

19時 **閉会式**

イベント総評 **黄有福、隈部紀生**

トロフィー贈呈

送別の辞 **鄭宋題**光州広域市副市長

閉会の辞 **安琇榮**MBC・PD協会長

20時 **夕食**(ホリデイイン光州ホテル)

10月24日

9時 **チェックアウト、観光**

アジア文化殿堂

李起杓殿堂院長の歓迎があった。

日本からの参加者(参加申し込み順)

新井順子、大西あゆ子、福嶋良章、中村貴

志、渡辺紘史、前川英樹、深尾隆二、後藤和

晃、鈴木嘉二、手塚恵子、金平茂紀、田中則

広、隈部紀生、音好宏、隈元信一、金廷恩、

西村睦生、大園百合子、根橋智美、中町綾

子、玄武岩、渡辺浩平、呂智ヨソ

韓国・光州で感じし…考えたこと

柏木登

今回、光州の地であらためて感じたことは、「日本の番組は美に良く出来ている」ということ。ドラマ部門「アンナチュラル」、エンターテインメント部門「ラタモリ」を観て感じられる、注がれたエネルギーの総量と、演出（構成）の手際の見事さには、今さらながら感心・感動する。制作の各プロセスが丁寧な熱心に（つまり完璧に）出来ているからこそその出来栄え、素晴らしいチーム力。ドキュメンタリー部門の「里山のふところ」は上越ケーブルビジョンの制作・放送なので、前記の全国放送番組とは趣を異にするが、制作者が地域に注ぐまなざしの温かさ、エリアの人々と共有する時間の重みに感じ入った。

韓国・中国の各ジャンルの作品も興味深く拝見した。いずれも巧みに作ってあるなあ」と思う。ドラマ2作品は、話の筋も画面構成も判りやすさを大事にしている印象で、劇画的・漫画的な明快さが際立っていた。ドキュメンタリー2作品も巧みな出来上がりであるが、調査に基づいた謂わば構成台本（完成予定台本）に忠実に取材VTRを入れ込んだ印象が残った。中国の「人生一串」は串焼き屋台料理という面白い視点で中国各地域の今と、人間模様、人生模様をスケッチした番組で、ドキュメンタリーという枠には収まらないもの。制作者はグルメドキュメンタリーと称していた。韓国の三代〜延辺娘の東京定着記」は観た人の多くが誉めていた番組。朝鮮族の祖母・母・娘が、中国延辺・ソウル・東京に別れて暮らすという取材対象の構図は判りや

すく、家族の物語が3つの国の歴史と今を炙り出す構成は良く出来ていた。加えて、その女性三代の人柄・表情が魅力的で、共感を呼ぶ。惜しむらくは、ドキュメンタリーの妙味、取材し続けることによる深まりが感じられなかったこと。ディレクター曰く、企画に2ヶ月、リサーチに2ヶ月、撮影取材が1ヶ月半ということなので、やはり取材時間の醸す味わいがある一つ深まらなかったのが残念。巧みに構成された、好感のもてる作品ではあった。

今回のラインナップには、1本制作費が数10万円の韓国ローカル・バラエティ番組、また一方で配信での回収を見込んだ中国のノンフィクション番組や、大型ドラマ・シリーズもあり、時代を映した多様さがあった。ネット上での先行公開を念頭に置いた番組も複数あり、画面の色目や構図、被写体のサイズ、カットのスピード感などにネット配信を意識した手法が見受けられた。急速に変化する放送・通信環境、5Gの時代に、今後、各国が持ち寄る番組の内容はどう変わってゆくのだろうか。

日韓中のテレビ制作者が一堂に会して、各国の番組を一緒に見て意見を交わすとは、あの意味で素朴な催しではあるが、とても貴重な機会だと再認識したこともあった。中国の有名演出家は「はたしてTVドラマ制作を続けるべきか？ネットにシフトすべきか悩んでいる」と発言した。2日目のシンポジウム内容も放送ではなく、マルチ・チャンネルやユーチューブでのコンテンツ展開について終了した。放送の在り方や、放送番組の展開の変わり目が来ている。さて、日本の番組は今後どう展開してゆくのか、行くべきか。

最後に一言。今回、韓国PD連合の皆さんの運営は実に見事で、同時通訳さんも素晴らしい、充実した上映会になった。当会の世話役、深尾さんのご尽力にも心より感謝します。

女性の活躍とテレビの未来

隈部紀生

私が日韓中テレビ制作者フォーラムに初めて参加したには、2006年の韓国光州の第6回大会からである。それ以来12年たった今年の大会に参加して、大きな変化が感じられた。

その一つは女性の活躍が目立ったことだった。参加した作品の中には、ドラマで脚本家から、プロデューサー、ディレクターまですべて女性という作品が登場したことだった。また会場での質疑でも男性より女性の質問が多く出て、国際的に男女参画社会が大きく進展したことを感じた。

またドラマについては3国とも日頃から他の2国の制作の動向をかなりよく知ったうえで、新しいものを作りたいと努力していることが察しられた。エンターテインメントについてもスタジオでのトーク、ロケ先でのトークの面白さを前面に立てている感じがした。これに比べてドキュメンタリーについては、3国それぞれの事情があつて、韓国側の狙った「メディアはよりよい共同体のために何ができるか」というテーマにストレートに向き合った作品は少なく、「光州事件」による市民革命を誇る韓国の主催者を落胆させたようだった。

も一つ今回のフォーラムでは、韓国側が、

シンポジウムで、放送と通信の融合が進んだ実態を明らかにして、韓国や中国では、まだ放送はされていないインターネット向けの作品が展示されたことだった。この点では遅れている日本からの参加者は驚かされたが、同時に会場では、小さなケーブルテレビ局が作った番組も展示されて、作品制作の原点に立ちかえることも大切であることが示された。

来年の中国でのフォーラムのころまでには、3国とも、AI（人工知能）とかビッグデータが今より作品の制作に大きな役割を果たしていることが予想されるが、そういう中で放送が制作の原点を忘れずにメディアの将来展望を見つけていくことが大切だと思つた。

雑言・プライミング

近藤邦勝

世界の片隅でかつてTV制作者であつた自分とグローバルメディア戦争の只中で片腕を失いながら、ささやかに生を全うしている映画のつましい主人公の姿がW―光州・日韓中PDフォーラム。残像として持続的に意識の中に立ち昇ってくる三カ国のコンテンツのあれこれ…。

共同体の桃花源郷化、乃至、小国寡民思想を徹底する試み「よりよい共同体に向けた市民参加」というテーマ。

日本発「里山のふところ」生きるマンマおかわり！「雪国の里山に生きる共助システム（結）を美にほほえましく暖かく切り紡いでいる好作品。

一方

韓国発「三代：延辺娘の東京定着記」朝鮮

族三代家族の離反・分化、定着、切り口を曝し、縫わないまま開示した秀れた展開と視点。寸止めの業、呈示した先は自分で考える。「ボケ・シと生きてんじやねエよ」とチコちゃんに叱られそうな気持になった。日本でビールなんか飲んで寝転んで見ていたら何も感じなかったら、この番組・韓国・光州に身を置いて正座して観ると韓日に分断された祖母・母・娘の実際がさまざまと体感された。その地へ行って経験してみなければ判らないことが有るとしみじみ知らされた光州。僕の想像力の拙さばかりではあるまい。

次に、中国発「狩場」ドラマだからテーマべつたりとはならないが、登壇した監督兼脚本の姜偉氏の佇まいに感銘を受けた。大人(たじん)なのだ。尊崇する陶淵明や蘇軾に通ずると勝手に感じる。静にして激、強にして寂。すつと会場を見る眼差し、淡々と丁寧に答える声の調子。悠々として迫らざる…。これも現場で現実を経験してみないと説明の仕様もない。

素敵な光州フォーラムでした。

言語の壁

鈴木弘貴

今回、久しぶりに日韓中フォーラムに参加させていただいた中で、気になった作品が二つあった。一つは、韓国のドラマ『先にキスからしましょうか?』であり、もう一つは中国のドキュメンタリー『人生一串』である。

前者は中年男女の恋愛をモチーフにしたものであり、制作者の説明によると、この中年

カップルが、不釣り合いな若者言葉を使うところが、ドラマ進行上のアクセントになっているという。後者は中国各地の屋台串焼き屋さんの紹介番組で、その料理へのこだわりや常連客との交流が主題だったものであるが、制作者としては、食材や調理法とともに、様々な中国の方言が飛び交うところが、中国における多様な文化を表象する面白みであるとの説明であった。

しかし、残念なことに、コリア語も中国語もさつぱりの私は、画面の端につけられた日本語字幕だけが言語テキストの理解における頼りだったため、上記のような「アクセント」も「面白み」も味わうことができなかった。

考えてみると、今年の大河ドラマの『せごどん』でも、島部でのシーンではセリフに「字幕」が付くし、薩摩隼人が話す鹿児島弁も名古屋出身の私にとって「言語の壁」が全くないか、と問われれば、正直、十全にその情感も含めて完全なコミュニケーションが成立していると言いつける自信はない。

私が大学で担当している科目の一つに、「国際マスコミュニケーション論」というのがある。この授業は、要は、メディアコンテンツが大量かつ一斉に国境を越えて消費されるという事象と、ベルリンの壁崩壊などを始めとする社会・文化変動を結び付けて論じているものである。

実は、この授業を日本人の学生相手に進めるにおいて、必ず「納得」させなければ次に進めないポイントがある。それは、「言語の壁は、必ずしも高くない」という言説である。日本語という、非常に地域的に限定された言語文化空間内に存在する我々にとって、「言

語の壁」を強調してしまえば、国境を越えるコミュニケーションなど他人事にしか聞こえない。このため、「映像の持つ力は言語を軽々と越えるコミュニケーション能力を持つ」、などと、様々に証拠立てて論じる時間を必ず取っている。

授業では、「君たちがおばあさんになるまでには、完全な自動通訳機ができて、『言語の壁』など消えてなくなるよ」と言い放っているが、今回のフォーラムに参加して、このような無邪気なことを言うべきではないかな、と考え始めている。(聖心女子大学 国際交流学科教授)

光州事件と放送

鈴木嘉一

初めて訪れた光州は雲ひとつない青空の下、鮮やかに色づいた街路樹が美しかった。第一に行きかったところは、韓国の現代史に刻まれた悲劇・光州事件の現場だった。「ぜひ見てほしい」という韓国PD連合会のはからいで、フォーラムの最終日にそれがかなった。

1979年10月に起きた独裁者の朴正熙大統領暗殺事件後、韓国では民主化要求の動きが活発化していた。しかし、クーデターで権力を握った全斗煥将軍(後の大統領)ら軍部の新勢力は80年5月、戒厳令を全国に拡大した。光州で自然発生的に広がった市民や学生への反政府デモに対し、戒厳軍が武力で弾圧し、多くの死傷者を出した事件である。

「国立アジア文化殿堂」は光州事件を後世まで伝えるとともに、アジア文化のアーカイブ機能を持つ文化情報院、劇場などがある複

合文化施設。38年前、この前の広場は軍の銃弾で血に染まり、市民たちが最後まで立てこもった旧全羅南道庁舎には弾痕が残っているという。前の晩、一緒に飲みに行った韓国のドキュメンタリストが「政府はこの庁舎を解体しようとしたが、光州市民の強い反対運動で保存されたんです」と教えてくれた。

ちょうど開催中の「光州ビエンナーレ」を駆け足で鑑賞した。95年、民主化運動の精神を根底に据えて創設された国際美術展とあつて、平和、人権、権力者批判、難民問題など明確なメッセージを放つ作品が目立った。

残念ながら、時間の関係で見字できなかった「5・18民主化運動」という本が配られ、金浦空港まで4時間かかるバスの車中で一気に読み終えた。30ページに及ぶ記録写真が生々しい。当時の韓国全体の政治状況を押さえながら光州での市民対戒厳軍の戦いをリアルに描いたドキュメントから、光州事件の全体像が浮かんできた。抵抗する市民たちは自力で武器を調達して応戦し、一時は軍を追い出した。この間、武装勢力の統制と市内の治安、秩序は保たれ、女性たちは炊き出しに協力したというエピソードには感銘を受けた。

「市民の皆さん、今戒厳軍が攻めて来ます。愛する我が兄弟、我が姉妹が戒厳軍の銃や刀に倒れています。皆で戒厳軍と最後まで戦いましょう。私たちは光州を死守します。私たちは最後まで戦います。どうか私たちに忘れないでください。最後の拠点の道庁舎が鎮圧される5月27日未明、庁舎内の放送室から大型スピーカーで女性の声 flowed。このくだりでは、不意に目頭が熱くなった。

今回のフォーラムへの要望としては、番組視聴の前に、番組のその国における「位置づけ」をきちんと知った上で、見たいと感じた。例えば、この番組は「全国放送」なのか「地方放送」なのか？もしくはインターネットの中だけの放送なのか？また何曜日の何時に放送している番組なのか？ゴールデン番組なのか？深夜番組なのか？ドラマだったら、全何話の今回視聴する番組は何話目なのか？など。事前に情報を与えすぎると視聴が偏るといった考え方もあるかと思うが、位置づけを知った上で視聴できた方が、その後の質疑応答を含め、深まった議論が可能になるのではないかと思う。

今回、フォーラムに参加し、日本からの作品「アンナチュラル」「里山のふところ」各チームと交流を持った。さらに懇親会等で中国、韓国の制作者と情報交換し各国の放送業界がおかれている現状を知る事ができたのは、非常に貴重な経験であり、かけがえのない財産となった。今後の番組の制作に生かしていきたい。(NHK「フタモリ」C/P)

制作者がとらえる「現在」

中町綾子

第18回目となる今年のフォーラムではひとつの大きな変化があった。これまで、参加者には出品作品を収録したDVDが配布されていたが、その記録メディアがUSBフラッシュメモリになった。フォルダーをいれれば名刺サイズだが、記録部分はわずか1.2cm×2.5cm厚さ4.5mm、重さ1g。パソコンへの

取り込みも簡単になった。棚に並んだ歴代のDVDボックスとはバランスがとれないが時の流れだ。眺めてみると、私のフォーラム参加はちょうど10回目。2007年の第7回が初参加で、第10回(2010年)と第15回(2015年)は日程が合わなかった。

前置きが長くなったが、今年に日本の出品作、とりわけ「ぶらタモリ」と「アンナチュラル」に寄せられた会場の声を紹介したい。ジャンルは違うが、どちらの作品にも「情報量が多い」という感想が多く聞かれた。クイズ形式で町を歩く中で触れる情報量の多さ(「ぶらタモリ」)、スピーディーな展開の中に織り込まれる情報量の多さ(「アンナチュラル」)は、韓国、中国の番組に比べても圧倒的だった。情報量の多さへの満足感、その情報の確かさ、構成の緻密さが、評価されていた。コーヒーブレイクでは、他の国からの参加者から、きつちりしていることの善し悪しがあるのではという意見も聞いた。確かに、たとえば韓国の出品番組「ま塩」は、視聴者(夫婦)参加型のゲームバラエティでハプニング性に富んでいたし、ドラマ「先にキスからしましょうか」は、コメディでもあり、アドリブが多いように見えたし、ストーリーの展開も大胆でもあった。また、中国制作のドラマ「狩場」では映像表現的な壮大さ・大胆さがあったように思う。いずれにしても、それがきつと制作者がとらえる「今」大事なものなのだと感じる。

さて、USBフラッシュメモリを借りて御覧になる方に、一つ番組ガイドを。今回のフォーラムでは、到着日初日から第1セッションがあった。作品は、韓国のドキュメンタリ

ー番組「KBSスペシャル 三代ノ延辺娘の東京定着記」だ。中国朝鮮族の祖母・母・娘はそれぞれ、中国・韓国・日本に暮らす。そこに映し出される社会的な状況・心情ともに大きな反響があった。韓国国内の中国朝鮮族は8万人。日本では8万人という。

フォーラム感想・記録の共有を

玄武岩

大会テーマ「より良い共同体に向けた市民参加」は、近年のあたりさわりのなさからすると、韓国の「民主化の聖地」である光州ならではの設定であった。閉会式の総評では「より良い共同体」についての議論がなかったという指摘が中国や韓国側からなされた。しかし大会テーマが示そうとしたのは「共同体」よりも「市民参加」ではなかったか。

そもそも中国語のテーマを日本語に直訳すると「より多くの参加、より良い発展」(更多的参与、更良好的发展)となり、「共同体」だけでなく「市民」も捨象されている。テーマについて議論がなかったのではなく、テーマそのものについての共通の認識がなかったといえる。

中国側の総評を行った黄有福先生は、歴史認識をめぐる韓国側の問題提起が激しくなってきたことから、フォーラムが成熟期に入ったと評価した。2014年横浜大会での『基町アパート』に対する韓国側の激しいクレームを念頭においてのことだろう。当時のように「表象すること」が争点となるならともかく「表象しないこと」を問題視するのは意表を浮かれたといつてよい。その分、追及の度合

いは緩かったものの、今回のフォーラムは参加者どうしの交流や議論が少なく「成熟してきた」感がある。

フォーラムが持続性をもって発展していくためには、その成果を蓄積することが大事だ。そういう意味で会報の本誌面はフォーラムを記録する貴重な場である。おそらく韓国や中国でも何らかのかたちで記録されていることだろう。日韓中でこれらの記録を共有することはできないか。

たとえば、本誌面を韓国語と中国語に翻訳すればどうだろう。中国側や韓国側から読まれるとなると、率直な感想や意見は開陳しにくいかもしれない。しかしフォーラムについての感想を、のちに冷静に振り返り、それを共有することができれば、これまでの体験を未来に向けて生かすことにもつながる。初めての参加者にも参考となるはずだ。

こうしたフラットフォーラムは、北海道大学の東アジアメディア研究センターが協力できる分野である。ホームページに日韓中テレビ制作者フォーラムのコーナーを設けて、まずこの誌面から、許諾を得られたものに限って韓国語と中国語に翻訳したい。軌道に乗れば、韓国や中国からも原稿が届くだろう。

フォーラムがより活発な議論の場になることを願い、それぞれの記録を共有する方法の構築を提案します。

参加して良かった

深尾隆一

総務委員として、また写真撮影担当として4日間参加、5月の準備委員会も含めて二度

目の光州でした。海外でのフォーラム参加は初めてで、有意義かつ楽しい経験でした。思いつくままに感想を述べます。

冒頭の韓国ドキュメンタリー「三代」には感動しました。韓国の参加者達ですら知らなかった情報が満載され、日韓中にまたがった広い視点で描かれた内容は、大会のテーマにも添う堂々たる作品でした。

「朝鮮民族」ではなく「朝鮮族」という言葉、番組のキーワードにしている事実。その朝鮮族を多く生み出すに至った原因が日本にある事実。そして二代目が母国韓国のチヤイナタウンでゲッターを形成しているという事実。さらに三代目が事もあろうに日本で新しい夢を実現しようとしている事実。いずれも私にとって新しい発見でした。また、政治的にも大きなテーマを含んだ内容を、周到な取材と抑制の効いた編集で、心温まる家族愛に包み込んだ制作者の力量。見事なものでした。こういった作品こそ、当フォーラムに相応しいものだと思います。

中国の作品で強いて挙げるとすれば、姜偉監督のドラマ「狩場」の秘められた反骨精神でしょうか。激しい競争に明け暮れる中国経済界の現実と、金と権力が全てという現状に立ち向かう主人公の描き方は、ステレオタイプではあるものの、現代中国に対する批判精神が十分に見て取れました。それにしても金のかかり方、ハリウッドばりの手法は凄いと感心しました。中国ドラマと言えど古典的な歴史物しか知らなかった私は目を見張るばかりでした。

余談ですが、姜偉監督が日本のドラマ「アンナチユラル」に対して大きな関心を寄せ、

「脚本は誰が書くのか？」とか制作体制について詳しい質問をしていたのが印象に残りました。これに対する新井・大西の二人の回答も見事なもので、誇らしく思いました。

「より良い共同体に向けた市民参加」というテーマに、全体として最も生真面目に取り組んだのは日本の作品でしょう。特に上越ケールビジョンの「里山のおとこ」は、過疎や高齢化という共通の問題にさらされている韓国、中国の人達に新鮮な刺激を与えたようでした。韓国の三代目もそうですが、世代間の分断を招きがちな時代の変化の早さに抗して、共同体を維持して行く新しい視点を提供し得た作品だったと思います。

「ブラタモリ」は、その情報量の圧倒的な多さが、韓国・中国の制作者を驚嘆させたようです。長期に亘る、しかも足で稼ぐ取材と、たった一日の収録、このギャップにもビックリしていました。ネット全盛の時代における取材時間をかけた収録、テンポの早い編集といった昨今の潮流のあえて逆をいく手法は、視聴率競争の激しい時間帯ではあり得ない、と韓中両国のスタッフも感じたようです。

大会全体は成功だったと思います。運営の仕方にはいささかの不満もあり、幹事役の人としてはそれで走り回ることが多かったとは言え、終わってみれば充実していました。食事は美味しく、街は紅葉真っ盛りで美しく、旅の魅力も味わえました。観光という意味では、準備委員会も含めて一度光州を訪問し、より多くの魅力に触れることが出来て幸運でした。

番組は一人で制作する

上越CATV 福嶋良章

日本、韓国、中国のテレビ制作者が交流を深め、作品を視聴しながらテーマに沿って意見交換し、各国放送文化の発展に活かしていくことを目的とする本フォーラムに弊社の「里山のおとこ」生きるマンマ・おかわり〜」で参加できたことはこの上ない喜びであります。フォーラムの場で各国スペシャリストから頂戴したご意見は、弊社制作現場全員の喜びであり、励みにもなっております。作品をご推薦いただきました放送人の会の皆様、フォーラム関係者に感謝いたします。

今回で18回目を迎えた日韓中テレビ制作者フォーラムは、韓国光州の金大中コンベンションセンターで10月21日から24日までの4日間の日程で開催され、地元韓国に加え、日本、中国から200名余りの放送関係者が一堂に会して各国で放送された番組を視聴しながら意見交換を行いました。特徴であり強みである隣人視線で番組制作を日々行っている我々が、グローバル視線で日々番組制作を行っている制作現場のスペシャリストから、生の声をお聞きする事ができた貴重な機会であり、エリアを限定して発信する番組制作の観点と、エリアを限定せず(グローバルに)発信する番組制作の観点とについて、今後の制作現場で参考になるご意見やご感想を沢山いただいた機会となりました。

会場で取り交わされた意見の中で私の印象に残った事は、一つ一つのナレーションの表現や画面内スーパー(文字)に対する第一印象と番組を視聴した後の総合的な番組の印象で、

各国でそれぞれ受け止め方、感じ方の違いがある事を改めて感じさせられ、今後の番組制作にあたり一つ一つの表現の難しさを感じるきっかけとなったことです。また、一人で一年間かけて制作した弊社に対して、多くのフォーラム参加者から「番組制作は一人で制作する。それが番組制作の原点だよ!」とお声がけを頂き、弊社の日々の取り組みに自信を持つことができ、今以上にローカルメディアとして番組制作力を向上できる自信も持つことができました。今回のフォーラムは、「より良い共同体づくりのためのメディアの役割について」をテーマとして掲げられ、色々な考えが脳裏に残ったKBSスペシャルの三代目延辺娘の東京定着記からフォーラムが始まり、開催期間を通して多くの素晴らしい番組を視聴させていただきました。

そして日韓中の各番組に対する活発な意見交換がなされて、言葉や文化を越えて新たに生まれた番組制作の方向性が今後の制作現場に反映されて行く事を感じるとる事が出来ました。最後に、「日韓中テレビ制作者フォーラム」が時代の背景にマッチした形で今後も変革しながら継続される事を祈念して、地域のローカルメディアである弊社が参加させて頂いた意味を考えながら私のレポートとさせて頂きます。ありがとうございました。

韓国PD連合への手紙から

前川英樹

(放送人ブログ 前川日記)

10・20(土)

明日は、4時半起床。5時15分タクシー。早いから寝ようと思ったところに今野氏から電話。時間は20時半過ぎ。「体調不良で韓国行き不可。虚血性腸炎で救急搬送された。今自宅に戻って静養中。開会挨拶など万事代行よろしく。」

「何よりも静養してください」と言っても、の、参ったな……。挨拶の趣旨確認、関係者連絡、飛行機キャンセル手配、などなど。すぐには寝られず。強めの水割りを飲みなおして就寝。

・・・というところから、今年のフォーラムは始まった。

翌朝、羽田に着いた途端に金浦行きは1時間ダイレイドと知らされた。長い1日になることを覚悟。今回は前途多難かと思つたのだが、終わってみればまあ何とか無事に終了というところだが、最終日の朝にシリアで長く拘束されていた安田順平氏の解放のニュースを知る(もちろん、前日夜にネットで情報捕捉していた人たちもいたなど、いろいろあつた4日間だった。日本に戻って一息入れてから主催団体である韓国PD連合にお礼の手紙を書いた。これを以つてフォーラムの報告に替えたい。(一部割愛)

韓国PD連合会 会長 柳池烈 様

日本 放送人の会 副会長 前川英樹
韓国PD連合会のご尽力により、第18回「日韓中テレビ制作者フォーラム」光州大会が順調に終了したことに、心より御礼申し上げます。

私個人としては、韓国でのフォーラムは慶州、釜山に続いて3回目ですが、韓国の秋は

いつも美しい。鮮やかに色づいている樹木の葉と高い秋の空、そして木漏れ日。心に残る景色です。

今年も、その美しい秋に開かれたフォーラムは、忙ししかし充実した4日間でした。韓国PD連合会の運営、進行には、創意工夫が随所に見られ見事でした。また、ホスピタリティーの面でも心配りが感じられました。

特に、字幕の翻訳と同時通訳が充実していて作品理解に大きく貢献していました。従来に比べ格段にレベルが上がつたと思います。間違いなくフォーラム成功の大きな要因でした。

個別の番組評価については様々な意見があるでしょうが、私たちの間では「三代 延辺娘の東京定着記」を高く評価する声が多くありました。国家、民族、家族、文化の関係という極めてデリケートな問題を、優しく温かい視線で切り取ることで、そこにある困難な問題の根の深さを逆に感じさせる大変優れた番組だつたと思います。日本に8万人もの朝鮮族(※1)の人々がいるということをも日本の参加者は誰も知りませんでした。その事実だけでも刺激的でした。(※2)

また、シンポジウムのテーマも時宜を得たものであり、スピーカーの発言も興味深いものがありました。もう少し時間があるともっと充実したものになつたでしょう。(※3)

一つだけ残念に思つたことを書いておきます。今回のテーマは「新しい共同体づくりと市民参加」でした。私が開会挨拶で触れたように、このテーマは光州で開かれるフォーラムだからこそ相応しいし、そこに込められた韓

国メディア関係者の熱い思いを私たちは理解したつもりでした。そのため、今回日本からの参加者には光州事件記念館を是非見るように、と強く勧めたのでした。しかし、日程の都合でしようか旧市庁舎を外から見ただけであの優れたアート感覚で展示された記念館内部を見る事ができませんでした。資料として頂いた光州事件の記録を帰りのバスで読んで人たちは、「記念館の展示を観たかった」と言っていました。多くの日本人が5・18記念館を見るべきでしょう。個人的体験を付け加えれば、私が学生時代の1960年代に、韓国学生は当時の李承晩政権に激しく抗議したことに刺激を受けました。あの時代の民主化運動が地下水脈のように光州事件に、そして現在につながっているのではないかと思つて

います。

準備会での意見交換を踏まえ、政治的意味に直接触れることに配慮されたであろうと思いつつ、私の思いを率直に申し上げました。(※4)

とはいえ、光州ビエンナーレを観られたことはとても良かったと思います。(※5)

(略)

今後のフォーラムの在り方につきましては、3月に会長名の手紙でお知らせし、準備会で説明した通りです。来年の中国大会にどのような形で参加するかということも含め、放送人の会からお伝えすべきことがあれば、ご連絡いたします。

最後になりましたが、今野会長から「出発直前の体調不良で参加できず、大変残念でした。韓国PD連合の皆さまはじめ多くの方にご心配をおかけし申し訳ありません。漸く仕事に復帰したところで、お見舞いをいただきありがとうございます。」とお伝えくださいます。(※6)

「日韓中テレビ制作者フォーラム」光州大会でのお心遣いに重ねて御礼申し上げますとともに、貴連合会のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

以上がお礼状である。

これに付け加えるとすれば、今回の日本からの参加作品どれも好評で番組選定は的確だつたと私は思う。中でも「アンナチュラル」(制作:ドリマックス O.A.TBS)への注目度は高く、質疑が終わつても個別の意見交換が続いていた。新井順子プロデューサー 塚原あゆ子ダイレクターの受け答えも見事で感心した。総じて各国番組のスタッフも女性が多く、会場での発言も女性が目立っていたようだ。

ともあれ、大きな曲がり角を迎えようとしているこのフォーラムについて、放送人の会として今一度、つまり最終的な立ち位置の確認が必要である。韓中両国主催団体への対応を誤らないためにも、あと1年を大切にしたい。

*1 朝鮮族 中国に居住し中国籍の朝鮮の人たち。中国では少数民族とされている。約200万人。日本の植民地時代に中国に移住した人が多いという。番組では、韓国に80万人、日本に8万人の朝鮮族の人たちが暮らしているという。そこには、在日韓国人朝鮮人問題とタブリつつも別の問題が存在する。

*2 事務局に参加作品収録のUSBチップがある。

三代一を是非見て頂きたい。

*3 「インターネット時代のテレビとの関係」は、

私の現役時代の最後(2)、000年時点のテーマであった。いま、ネット社会は格段の成長している。しかし、テレビの可能性という論点とその論理は基本的に変わっていないし、ビジネス論が優先して議論が進むという状況も変わらない。それよりもフェイクニュース問題という観点からネットとテレビの関係を議論するべきではなかったか。

*4 「政治的意味に直接触れることに配慮されたであろう」準備会議段階で、中国は「民主主義」「民主化」に触れることに強く抵抗を示した。その後経緯は不明だが、中国から何らかの要請があり、韓国がそれに配慮したのかもしれない。

*5 光州ビエンナーレは現代世界を反映したアート展であって、シリア難民をテーマにした展示、国家・国境表現した作品(中国などの)ネット規制を鋭く批判した表現、などが目を惹いた。北朝鮮の絵画も展示。

*6 フォーラム最終日に連絡をしたところ、今野会長は仕事に復帰して、一同安心。

動画サイト bilibili の「人生一串」

渡辺洋平

「人生一串」を興味深く見た。中国語で「烧烤(シヤオカオ)」と呼ばれる串にさした焼き物を供する店とそこにどう人々のドキュメンタリーだ。多彩なカメラワークとこまかいカット割を組み合わせ、斬新な映像作品にしあがっていた。そのことは、中国の制作技術の向上という言葉でかたづけられるだろう。感慨をもったのはその点ではない。焼肉屋は清潔とはいえない。衛生状態にかなりの難があるやに見える。そのような題材に焦点をあてた作品がフォーラムに出品されたことに感慨をいだいたのだ。

以前、韓国が出品した作品に、不衛生な中華料理店がとりあげられており、中国側が上映を止めるというトラブルがあった。中国のメディアは「正面報道(プラス報道)」を宗とするので、自らの負のイメージを帯びる表現をきらう。それが海外で上映されたこといささかの驚きを感じた。

もうひとつが、当該作品を制作したのが bilibili だったことだ。bilibili とは中国の新興動画サイト。数年前、中国の留學生の報告で bilibili がとりあげられた。アニメ「銀魂」の画面にながれる「弾幕」についての分析だった。漫画家・空知英秋の「銀魂」は中国でも人気で、数年前、上海動物園がゴリラの子供の名を募集したところ、「空知英秋」がトップになり、公募を白紙にもどすという事件がおこっていた。

学生が発表につかされた「銀魂」は海賊版で、画面いっぱい「弾幕」がおどっていた。動画サイト bilibili は、ニコニコ動画から弾幕を拝借、日本のアニメ(その多くは海賊版)を弾幕付きでながし、中国のアニメ好きの心をひきつけた。

夜の席で、制作者の朱賢亮、陳英傑両氏と話をした。朱氏は長年、上海テレビ局でドキュメンタリーを手がけ、定年後、bilibili にうつったという。その収益構造をきくと、動画ではなく、関連グッズとゲームが売り上げの柱だという。bilibili は今春、米国のベンチャー向け株式市場「ナスダック」に上場した。中国のメディア産業は確実に変化している、それは日本人から見れば多分に変則に見えるが。(北海道大卒)

知ついても分からない、それぞれ

渡辺純史

フォーラム前日の20日土曜日の午後、私はソウル行 KTX (高速鉄道) に乗っていた。日本より一足早い紅葉が車窓を流れ、隣

には、乗車した際私の荷物を網棚に担ぎあげてくれた若い兵士がスマホをいじっている。韓国第4の都市、元大統領朴正熙(パク・チヨンヒ)の出身地として知られる大邱市で開かれた第13回アジアドラマカンファレンスに一緒に参加し、直接フォーラムの会場光州市に向かう会員の鈴木嘉一氏、中町綾子氏と別れ、翌日に到着する日本団を金浦空港で迎えようと、ソウルに向かっていた。

車内には他にも兵士の姿が多くみられ、帰省だろうか、停車する駅毎に降りていく。プラットホームには、家族を迎えられる兵士、恋人だろうか、早速手をつなぎ歩き出す姿もある。穏やかな陽気のなかで、いずれも柔らかな表情である。韓国における軍事的緊張緩和の空気が満ちているように見えた。

夕刻着いたソウル明洞では、在郷軍人会の反文在寅デモが100人程度、声を張り上げ旗を振って歩くが、警察官に誘導され、おとなしく解散する。その明洞、一歩入れれば、ありとあらゆる道に露店が並び、家族連れや友達グループ、そして多くのカップルが、口には何かほおぼりながら楽しげに歩く、というより人波が流れてゆく。丘の上の教会は、土曜のミサに蠟燭の炎が揺らめき、ソウルの夜は明るく派手やかな原色に輝いていた。そこには、かつてあった、どこか怒りっぽい街の

雰囲気は皆無であった。それは、彼らの心のどこかに宿った希望へのときめきのせいなのかもしれないと思った。

開催地光州市は元大統領金大中(キム・デジュン)の故郷である。21日から始まったフォーラムで上映された作品は9つ。

まず日本の作品では、脚本・野木亜紀子、制作・新井順子、演出・塚原あゆ子の女性トリオからなる「アン・ナチュラル」が注目され、登壇した新井塚原両氏が、終了後も参加者からの質問攻めにあい、なかなか解放されないという人気ぶりであった。

他の2作品、「里山のふところ」は、住民に密着した丁寧な取材と秀逸な映像で、共同体に息づく歴史の深さに迫ったドキュメンタリーと高い評価を受けた。東京大会で地方制作の複数の作品が紹介されたこともあり、地域住民の普段着の姿を活写する日本の地方局が少人数で制作するドキュメンタリーの層の厚さを改めて認めさせたのではない。

また、商人による計画的な街づくりの結果、運河を中心に倉敷の美観地区ができたというを紹介した「プラタモリー倉敷篇」は数か月に及ぶ丹念な取材を重ねた上で、収録は1日で済ますという制作体制が驚嘆され、中韓の制作者から多くの質問が集った。以上3作品、特にテーマ作品の出品に関しては、手前味噌だが、今年も3国では一番的を射ていたのではないかと思っている。改めて、日本出品作品の選考に当たった河野尚行さん、鈴木典之さん、隈部紀生さん、藤久米奈さん、鈴木嘉一さんに感謝します。

さて今回の作品テーマは「より良い共同体

作りに向けた市民参加」現在の文在寅政権下における光州市での開催ということで、準備会議での昂る思いのテーマ設定が日本と中国に若干の困惑を与えたことから、韓国の選考では一定の配慮が加わったのだろうか（私自身、今回準備会議には出席しておらず、あくまでも推測でしかないが）エッジのきいた作品が少なかつたと感じたのは私だけであろうか。

しかし、その中でも考えさせられる優れた作品があった。韓国KBS制作「三代・延辺娘の東京定着記」である。出発の遅れた日本団が韓国参加者の待ち受ける会場に着き、準備会議もなく慌ただしく始まった開会式に続き、そのままの雰囲気の中で上映された作品だったが、中国東北部、延辺地方に住む朝鮮族一家が三国に離れて懸命に暮らす今を、祖母の住む中国延辺、出稼ぎの母が生きる韓国ソウル、商社に就職して暮らす娘の住む東京を丹念に取材、淡々とした映像を積み重ねながら、共同体としての家族の苛烈な現状やそれぞれの思いを描いて見応えがあった。三国の現実や歴史にかかわる作品でありながら、中国や日本に向けられる視線はあくまでも穏やかで、むしろ自国韓国の単一民族意識や朝鮮族差別をいさめ、自国民の意識改革を訴える、極めて抑制された内容と映った。作品は最終盤でさりげなく、中国における朝鮮族の存在そのものが100年前の歴史から始まったことを告げるが、朝鮮族の中国移住が、日本による朝鮮併合や満州国建国に由縁することを知る我々日本人としても、その指摘をああいう形でさりげなく告げられて、うまくやられたと感じた。

しかし今になって初めて、うまくやられた以上に、深く考えざるを得ないことに気付いている。私は、描かれたような朝鮮族が、いま日本に8万人住んでいるとのナレーションを聞いて、すぐさま、何度もこのフォーラムに参加している朝鮮族の中国の黄裕福さん、前回東京大会など、数回参加してくれた北大の王梓安さん、加えて横浜大会でも東京大会でも学生通訳として活躍してくれた、確か4人ほどいたトリンガルの留学生たちの存在を連想したが、それはそれだけで頭から消え去り、今の今、この報告を書く段になって、やっと彼らに思いをはせている。

彼らが8万人いることを知っていても、彼らの出自がどうで、彼らの家族がどこで暮らしている、どんな思いでそれぞれ暮らしているのか。今の彼らに直接聞き、彼らの話を聞き、調べなければ本当に分かったことにならないのではないかと感じている。100年前の韓国併合、満州国建設、そして2万人の在日朝鮮族、そのひとつひとつ知っていてもそれは「知識として知っている」のではないのだ。

想起されるのは横浜大会における「ある出来事」。中国の歴史記念日とその日の上映作品に関して起きた問題である。知ってはいいたが、分からなかった、知ってはいいたが連想できなかつた、だから問題が起きたのである。

「同じような出来事」が最終日最終上映時に起きた。作品は前述した「プラタモリー倉敷篇」である。上映後会場の2人から質問があり、倉敷紡績では朝鮮からの徴用工が働かされていたが知っているか、日本ではどう認識されているのか、それは番組で扱わないの

か等々。

一人は番組中スマホで検索し、確認してからの質問だったらしい。質問に答えたNHK山本貴志氏の落ち着いて適切な返答で事は何も起こらなかったが、日本の参加者は、一瞬虚を突かれた。倉敷紡績に徴用工がいたことを知っていたが、彼らの思いにつながっていたことが分からなかつたので、虚を突かれたのである。ただ今回、会場のほとんどが、横浜の時と違って、この質問が的外れと感じていたことは分かつた。上映後元PD連合の会長オー・キヒョンさんが私のそばに歩み寄り、「申し訳なかつた。最後の質問者はPD連合の人間でなく、傍聴していた光州市民です。あのような考えはPD連合の本意ではなく、了解ください」と話しかけてきた。

今回、いかに韓国側が歴史認識で相変わらず対立する日本やサード問題で芸術分野を中心に鎖国関係が続ける中国に配慮していたか、光州事件の記念地をめぐるツアーで、日本と中国には別のメニューを用意したことでもそのことはわかる。

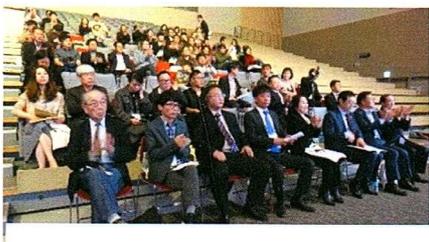
日本に帰り、ほどなくして、韓国大審院（最高裁）が日本企業に対する元徴用工の個人賠償を認める判決を出したことが報じられた。日本政府は「ありえない」「国際法にも悖る」といきり立った。韓国は「判決は尊重する」と今のところ沈黙を守っている。そして今、国会では「入国管理法改正案」が審議されている。日本の労働力不足を安直に、廉価な海外労働者によって賄おうとする、現代版徴用工を想起させるような法案である。

私もそうだが、日本人の我々は、そうした政治の流れ、国際間の動きに内向な発想をし

がちだ。なんでも日本が一番、争いがなく安全で豊かで平和で暮らしやすい。本当か、たまには疑ってみてもいいのではないか。他国のことを思い馳せてもいいのではないか。

韓国で見た、紅葉の中帰郷する兵士たち、迎える恋人たち、光州市のパザールに集う穏やかな老人たち、ソウル明洞で鮎をしゃぶつた娘を肩車して歩く父親たち、そうした平穏に暮らす人たちが一人一人の、その心の中にはマグマのように溜め込まれた様々な感情がある。そしてそれは時々あふれ出す。その考えの多くは日本人と裏腹のものがある。韓国人は日本の明治近代産業遺産の世界遺産登録に何を思うか。国の賠償と人間としての尊厳を保証せよという個人賠償とは違うものだという大審院の理屈をいかに評価するか。これも真逆のように見える。ことの良し悪しはともかく、「プラタモリー」に対して質問した韓国人の心のマグマは、日常的に重ねられ、煮詰まり、その時にドツと湧き出したものに違いない。もちろん、日本人にもマグマはある。今あらためて思う。お互いのマグマをお互いが分かりあう必要があるのではないか。

我々年老いた日本団は、もうそうした熱いマグマに付き合いきれないにしても、お互いの熱いマグマに辟易しない日本の若い人を前に押し出し、後ろについた自分たちは少しばかりの「一分かる努力」を重ねながら、小規模で、かつ実質的にテーマを絞った対話の場を今後、新しく模索していきたい、などと夢想している。東アジアが新しいフェーズに移ろうとする状況での日韓対立が激化する時代だからこそ、なおさらそう思うのである。



大会会場



光州到着



羽田→金浦便は1時間の遅れである



同 前川英樹氏



参加の辞 高健氏



歓迎の辞 李庸燮氏



開会の辞 柳池烈氏



同、鈴木嘉一氏



同、金平茂紀氏



会場から、沈霄虹氏



PD 李志云氏

着記

韓国ドキュメンタリー
「三代」延辺娘の東京定



乾杯



歓迎会



鈴木嘉一氏



新井順子氏 大西あゆ子氏 近藤邦勝氏



曾根英二氏



斎藤俊幸氏 田中則広氏



後藤和晃氏 中村貴志氏



隈本信一氏 隈部紀生氏



紅葉真っ盛りの光州市街



宋日準氏 渡辺紘史氏 斎藤俊幸氏



音好宏氏 沈霄虹氏



柏木登氏 鈴木嘉一氏 金平茂紀氏



宋日準氏 隈部紀生氏

日本ドラマ

「アンナチュラル」

制作者



大西あゆ子氏 新井順子氏

会場からの質問



昼食



日本ドキュメンタリー

「里山のふところく生き
るマンマ、おかわり！」

制作者 福嶋良章



会場から



韓国ドラマ

「先にキスからしましょうか？」

司会 孫正鉉氏



制作者 徐賢氏



会場から



姜偉氏



鈴木嘉一氏



中町綾子氏

楊林文化村観光



李章雨家屋



夕食



プルコギ



隈部氏 前川氏 鈴木弘貴氏



隈元氏 金平氏 中村氏



曾根氏 鈴木嘉一氏

前川バー



セミナー「より良い共同体
づくりのための…」



丘凡峻氏



権五祥氏



高賛洙氏



司会 洪景洙氏



陳英傑氏



朱賢亮氏

制作者



中国ドキュメント「人生一串」
セッション司会者 洪昌郁氏



光州・ビエンナーレ



参鶏湯

昼食



中町綾子氏

会場から



韓国エンタメ「ごま塩」
制作者 徐賢氏



会場から



制作・中村貴志氏



司会・洪昌郁氏

日本エンタメ「プラタモリ」



金大中コンベンションセンター1階多目的のホール



会場から



中国ドラマ「狩場」
制作者 姜偉氏

イベント総評



黄有福氏



限部紀生氏



受賞者



贈賞式



贈られたトロフィー



歓送の辞

鄭宋題光州市副市長



閉会の辞
柳池烈氏



立食パーティー



近藤邦勝氏 中村貴志氏

4日
観光



柳池烈氏 前川英樹氏

国立アジア文化殿堂



アジア文化殿堂裡起杓院長



旧支庁倉前



民主広場前



第46回 名作の舞台裏

花の乱 (NHK大河ドラマ)

1994年4月〜12月放送

日時・9月29日(土) 13時半〜16時半

場所・横浜情報文化センター・情文ホール

ゲスト・三田佳子(出演)

三枝成彰(音楽)

村上佑二(演出)

木田幸紀(制作)

司会・渡辺紘史(放送人の会)

渡辺 今日の「名作の舞台裏」は「花の乱」です。この作品は大河ドラマ史上最低の視聴率ながら、その出来は素晴らしく面白い、と言われてきました。近年「応仁の乱」の本がベストセラーになり、室町時代が注目されています。そういうことで、今回はこの作品をとりあげます。

ゲストを紹介します。三田佳子さんです。三田さんはこの番組の前に大河ドラマ「いち」の主役を務めておられます。大河ドラマの主役を二回も演じた女優さんは三田さん以外にありません。(拍手)



三田佳子氏

三田 こんな紹介をしていただいて恐縮です。「花の乱」は室町の狂気、いままでテレビ

ドラマで表現されなかった世界をやるのだというプレッシャーがまずありました。それは私だけではありません。三枝さんの音楽、演出、美術、スタッフ全員、出演者全員が何かいつもと違っていたのが印象的でした。

渡辺 次は三枝さんです。大河ドラマの「太平記」、時代劇「三屋清左衛門残日録」も手掛けておられます。「名作の舞台裏」に出たかった初めての作曲家です。

三枝 足利は大変難しい。戦前足利尊氏は国賊とされ、それに続く室町幕府も評価は低かった。しかし、面白い政權で、土地からの収入より流通や貿易などの収入を基盤としていた。お金はあったが基盤は弱く、そのためか華やかな文化が生まれ、金閣寺、能、世阿弥など日本が誇れる文化が生まれた。アーティスティックな時代です。

歴史大河で女性を主人公にしたのは初めて。いつもは男の武将が出てきて、幕があがる馬が走っている、というのが大河ドラマのイメージです。だから今回のテーマ音楽は、三田さんにふさわしい、嫺やかな曲を作りたいと思った。しかし多分通らないだろう。それで、レコーディングの時まで「まだできていない」と嘘をつき通して、レコーディングの時に、初めて聞いてもらった。みんな初めて聞いて「うーん」と押し黙った。今までのテーマと違ってピアノのソロで始まり、だんだん盛り上がるという形を最初から構想していましたが、印象的な仕事になりました。

渡辺 次は演出の村上佑二さん、「国盗り物語」「花神」「山河燃ゆ」とこの「花の乱」の4本

の大河ドラマを演出した、NHK出身では、現役最長老の演出家です。

村上 私に印象深いのは「一も二もなく視聴率がワーストワンだったことです。(笑い)その前に大河で「花神」をやり、これがワースト記録を作った。その記録を「花の乱」が破った。だから最低視聴率を誇っているところがあります。私がやることになって「私いいんですか?」といったくらいです。

音楽の話が出ましたが、私は全然驚かなかった。タイトルバックを作るとき、室町時代は夢幻能ができた時代だから、橋掛かりの向こうからこの世の人でない人が出てきて物語を始めるというイメージで、彼岸と此岸を想定していました。あの橋を渡ってくる人物は富子を想定しており、音楽は私の考えと完全に一致していました。

渡辺 次は木田さんです。木田さんの最初のプロデュース作品がこの作品で、現在NHKの放送番組の最高責任者である放送総局長です。つまりNHKは視聴率だけで人を評価はしないわけです。(笑い)

木田 確かについて最近まで視聴率最低の大河と言われていたのですが、それでも日曜8時の枠についてだけ言うと今放送中の「西郷どん」よりはいいんです。(笑い)

僕が一番印象に残っているのは市川森一さんとのやりとりです。市川さんは「花の乱」を書いていた時はまさに室町時代の人でした。私と部屋に籠って何週間くらいかの分の打ち合わせをすると、こまかいシーンだてが次々に出てくる。それを次はこう、とメモを取りながら打ち合わせをしていると、2時間くらいで数週間分の台本が出来てしまう。それほ

ど市川さんは室町の世界へ行っちゃってしまいました。この「花の乱」が純度の高いドラマなのは市川さんが全身全霊で打ち込んでいたためだと思います。

渡辺 皆さんの思いが強く冒頭からそれぞれ長い話になりました。

ドラマ制作には4つの段階を経て完成します。最初は企画と構想。二つ目はドラマの骨格となる脚本。三つ目は現場の演出と演技、つまり映像を作る作業。四番目は仕上げ、編集し音楽をつけ、完成作品となります。その四つの段階に従って皆さんに話を伺います。まず企画のスタートから。

木田 放送は1994年で、撮影はその前年、企画はその2年前にスタートしました。「花の乱」の前に「琉球の風」「炎立つ」という作品があります。「琉球の風」は半年、「炎立つ」と「花の乱」は9カ月という変則の放送で、いずれもNHKエンタープライズの制作です。スタッフはNHKの職員がほぼそのまま出向です。エンタープライズでは、大河ドラマをオンエアだけでなく、出版や観光、ドラマにゆかりの土地、史跡を訪ねるなどいろんな楽しみを提供する、そんな事業展開(メディアミックス)を積極的に進める狙いがありました。

この時期、スタッフは口々に「今までにないドラマを作ろう」と言っていました。それまで大河ドラマは、信長、秀吉、家康、あるいは忠臣蔵など皆さんご存知の時代劇がほとんどで、エンタープライズではそんな常識を破ろうとしました。「琉球の風」は沖繩の15、16世紀の物語。「炎立つ」は岩手県平泉に栄えた藤原二代の物語。そして「花の乱」は大

河ドラマで初めて本格的な室町時代を取り上げました。



木田幸紀氏

渡辺 室町を選んだのは？

木田 市川さんはそれまで、大河ドラマでは「黄金の日」 「山河燃ゆ」など、他にない作品を描いてきたのですが、私たちが更に「今までにないものを」と言ったので、「それでは誰も知らない世界、室町をやってみようじゃないか」と。それに私たちは諸手を挙げて賛成し取り組んだ次第です。

渡辺 富子を主役にしたのは？

木田 先ほど三枝さんが言ったように、大河は男性が馬に乗って刀を振り回すドラマが多かったのですが、ここは女性を主人公にやりたいと漠然と思っていました。そこに室町ということになったので一足飛びに富子です。しかし、まだよく知らなくて、稀代の悪女と聞いているが、素顔は知らない、本当に悪女だったのだからかと調べているうちに、これは実に魅力的な主人公だとわかってきて、その頃われわれは富子の魔力にすっかりはまっていました。

村上 室町にはスター性のある人物がなかなかいない。富子は悪女と言われていますが、応仁の乱が終わるまで悪女ではない。その後ちよつと悪女風になります。面白い。

このドラマの眼目は客観的に歴史をたどるのではなく、一人一人の心の中にある闇の世界に分け入ってみようというものです。日野富子はうつつつけの人物でした。市川さんは猛烈な勉強家で、山のような資料を読み込んで構成を立てていった。

渡辺 室町は二極対立の時代だと言われますね。

村上 全くその通りです。市川さんが指摘したのですが、天皇が南朝と北朝、応仁の乱は西と東、そして極致が義政と富子の対立、その富子も市川さんは、実は二人いたという設定を作ってしまった。

そんな輻輳した室町の社会、今でいえば分断社会です。だから非常に興味深いと実感していました。

渡辺 さて、あらためてタイトルの映像と音楽を見ながら、話を伺います。

—映像・タイトルバック

先ほど、テーマ音楽を三枝さんはレコーディングまで隠していたということですが、

三枝 通らないと思っていました。こんな出だしでは大河ドラマは始まらないという観念がありました。しかし、室町は戦乱というよりむしろ爛熟の時代というイメージが僕にはあります。能、生け花、焼き物が始まりました。これに次ぐ爛熟の時代は元禄、そして大正でしょう。その意味では非常に興味深い。映像は全く見ずに作曲しました。

三田 聞いていて、泣けます。私が主人公やつたからじゃなくてシーンとききます。三枝さんのコンサートに行くときの曲を演奏してくださる。それほどの名曲だと思います。

三枝 悪女ではなく三田さんのイメージでこの曲はできたと思います。

の曲はできたと思います。ピアノで静かに始まって、弦楽が入って盛り上がり、N響を使うのでトランペットを入れないわけにいかない、などいろいろ考えて作りました。



三枝成章氏

渡辺 主役富子を演じる三田さんが語りをするというのもユニークでしたね。

村上 タイトルで、能役者が橋掛かりを渡ってきて手前に来てお芝居をし、物語が始まる。そんなイメージで、語りも三田さんと…。

撮り始めるまえ、確か原宿のコロンバンだったと思いますが、お茶を飲みながら「三田さん、今度のナレーション自分でやりませんか」と頼んで決まったんです。

渡辺 これから、村上さんの演出、三田さんのお芝居について伺います。

村上 富子は、1回目にもありましたが、おこもりをする。そうすると、夢かうつつか、のような状態が現れる。それが後に影響を及ぼす。夢か現（うつつ）か、これも「二極対立」です。現在過去未来を結ぶ巫女的な役として富子を捉えると、三田さんがそれに非常に適した役者さんである。それは前からわかって

いました。「国盗り物語」で文藝座二の側室深芳野をやったとき、三田さんって不思議な女優さんだと思った。ある瞬間異界という別の世界へ瞬時にして移り変わっちゃう。そんな稀な女優です。

三田 ありがとうございます。そんな風に見えることが役者としての望みですね。はつと境界線を越えて、一人の人間があつちとこつちに生きるのですから。私、役者としてまだ先がありそうですか？（拍手、笑い）

渡辺 三田さんに、富子をどう演じたかを伺います。収録中に、市川さんとファックスで意見交換をなさったと聞いていますが…

三田 9か月間、作家が何を考え、ご覧になって満足なさつたかどうか、それを受け取り続けました。足りないところは村上さんや木田さんや皆さんとのやりとりに移って行くわけです。

私、収録前に富子のお墓のある華開院をお参りました。雨がそぼ降る中で、「これが富子の墓です」と言われて「えっ」となった。権勢を誇って、悪女と呼ばれた人の墓が何と淋しくて、小さくて傾いていて、誰も守ってあげてないようでした。そのとき「富子さんは、思っていたのと違うのではないか」と思いました。あの時代のなかで近代的で頭もよく、將軍様に逆らったあんなだけのことを言ったから悪女にされてしまったのだから、本当は今の世の中に先駆けてあの時代に生まれ、生きて、亡くなった方なのだと感じました。それで、まず外側から作ってみようと思つて、髪はいつも一紙乱れぬ綺麗な髪を整えていたのですが、富子さんは乱れることが内面に溢れている方だから、髪の毛も情が

こわくてちりちりのくせ毛だったろうと、床山さんに無理難題を言ってくせ毛にして、わつとふくらんだ頭になりました。雰囲気はよかつたのですが、毎回、くせ毛をやると時間がかかる。間に合わない。スタジオでは、皆この応仁の乱の時代を駆け抜けようと血走って撮影していましたから、こんなことで時間をとると、皆さんいらだつてしまう、ということ、だんだん省略しました。

でも、市川さんがお書きになった通りにやると、近代的で時代の先を生きた素晴らしい女性で、どんと悪女ではなくったのです。**渡辺** 演出の立場からはどう考えていましたか？

村上 美人の女優さんが髪をちぢらせることはなかなかありませんが、そんなことを積極的にやる女優さんが二人います。一人は三田佳子さん、もう一人は京マチ子さんです。二人ともこの番組にでいますが、似たところがある。京さんは黒沢監督の『羅生門』で多面的で重層的な女の役を演じている。あのとき京さんは非常に若かつただけで演技じつた。あれを見て衝撃を受けた。この番組での京さんの出演は少ないけど、持っているものがさすがに違うなあと思いました。

三田 京さんとやるときは震えるような思いでやりました。

村上 狂気みたいなものが漂ってくるって凄い。周囲はびりびりおそれをなしちゃう。三田さんとの共演は非常に意味があつたと思つています。

三田 それから錦之助さん。あの方も狂気を持つたかたで、市川さんは錦之介さんの山名宗全とのシーンを「これは宗全と富子のアリ

アだよ」とおっしゃつた。アリアと言われてどうすればいいんですか。1本、45分の番組のあいだ、ずっと錦之助さんと二人です。**渡辺** そのシーンを用意してあります。御覧いただけます。

—**映像**・応仁の乱の前にして、富子（三田佳子）と宗全（萬屋錦之助）の二人。（以下、市川森一脚本を忠実に再現します）

富子 「あなた様を裏切つた私が悪い。あなた様も悪い、あれほど死んではならぬと申し上げたのに」

宗全 「左様、御台様に死ぬなど言われたとき、それがし、武者でござるとお答えしたはず。武者に死ぬなど仰せられるは武者でなくなれと言われたに等しい。そもそも平安の昔より武者は矛を持つて邪鬼と闘い、命を賭して一心に信じた方をお守り申す。それが武者と申すものでござります。武者の端くれのこの宗全、御台様のために一命を賭すと申しました

が口先だけではありませぬ。それがしは御台様のために死にたかつたのでござります。さりながら御台様はそれがしが一命を受け取つてくださりませぬでした。このことがただただ無念と申し上げたのでござります」

富子 「懐かしいお言葉、男がおなごのために命を捨つると言つてくれておる。あれは私が椿と名乗る童だったころ、椿の庄に私をかどわかしたに來た酒呑童子という盜賊が、私を助けに來た少年に『おぬしはこの椿のために命を捨てられるか』と問い、少年が死ぬると答えると盜賊は私を少年に返して、みずからは滝壺に身を投げて果てました。その盜賊こそ私の実の父。父もまた私のために命を捨てて

くれたのです。あなた様の言葉を子の胸に受け止めて、久しぶりにあのときの父の言葉を思い出しておりました。父と同じ言葉を言うてくれるお方がここにいます。」

宗全 「盜賊と申されましたが、そのお方は立派なものふの魂を持つたひとかどのお方であつたに違いない。」

富子 「宗全殿の心底よくわかりました。もう二度とおなこの浅はかな情で武者の魂を傷つけるようなことはいたしません。」

—— 中略 ——

—— 間があつて、立つと——

富子 「ああ、虫の音が。宗全どの、私がいま心に思つておることを口走つてもよろしいか。」

宗全 「何なりと」

富子 「あなた腕に抱かれてみたい。あなた様の両腕にこの身を強く抱きしめてもらいたい。」

宗全 「御台様」

富子 「驚かれたか。將軍正室の身でありながらこのようなことを心に思い描くとは、私も悪いおなごじゃ」

宗全 「御台様、ただ今のお言葉、宗全、胸の奥にしまいます。生ある限りこの宝は何人にも見せません。ただこの身がいつの日かいつこかのいくさ場に果てる時、胸の奥より取り出し、言葉の主を思い浮かべてこの世を去りましよう。」

—— 音楽盛り上がり——

三田 音楽がいいですねえ。先生がお作りになつた音楽がこつという風にお芝居を引き立ててくださる。本当に音楽つて凄い。音楽がこ

ういう風に盛り上げてくれると泣くんですね。**渡辺** 富子、やつぱり悪女ですね。

三田 そうですか。心が飢えていたんですね。富子さんはしっかり生きてきたけど、宗全の大人の男の色気に抱きしめてもらいたいと芯から思つた。女心ですね。そんなところが私は好きなんです。父親の中に男をみたり、本当の夫の義政への抵抗があつたり、昔の人ですからこれ以上はいかないんですが、そこがまた美しいところです。

市川さんから、お正月にいただいたファックスを読んでいいですか。

「花の乱」の年が明けました。初夢に三田さんと（主人の）康夫さんとの共演の夢をみましたので、ご報告がてら新年のご挨拶を申し上げます。

夢の内容——ロケ、見学に行った私がタクシーに乗つて帰ろうとすると三田さん（富子の扮装）が見送りに來て、車の中の私と密着して握手をします。車は走り出すのですが、三田さんは手を離してくれません。車はスピードを上げるのに三田さんはいつまでも私の手を握つたままです。三田さん危ない。手を離しててください」と叫んでやつと三田さんは手を離します。同時に康夫氏が隣席に現れてこう言うのです。「佳子さんはああいう女なんだ。自分の気持ちに素直なあまり、足元の危険を省みない。情熱が先行して、身の危険に気がつかない。素敵なことだよ。女優としてはね。」ともあれ、初夢が三田富子だったことは嬉しい限りです。 1月3日 市川森一

—— というのが出てきました。ほのぼのと、昔を思い出します。市川さんはもういらつしやいませんがこんなファックスのやりとりをしたん

ですね。手を離さないというのは私の執念ですね。それが市川さんの夢の中にもでたんですね。

渡辺 そんな風に夢を見るまでに打ち込んで、市川さんは、こういうシーンを書いたんですね。

三田 はい。こうやって男と女のシーンを書いたところが市川さんの凄い所だと思います。そして三枝先生が凄い。ちゃんと予測してあの曲を作っていたんですね。女の主人公の揺れの部分を予測して…

三枝 いや、これは映像を見て書いた。(笑い)
渡辺 当時は画を見て、ここからここまでと音楽を指定して、ひとつずつ曲を作ったんですね。

三枝 そうです。毎週録音です。最近はやりませんが、昔は毎週見に行って、4日後くらいに録音しました。画を見て作曲しているのが入り入ります。

三田 曲を聴くと思います。実は、この2年後私はガンになり、ステージ4でした。本人はあまりリアルに感じていなかったんですが、医者はい「このガンは2年前に発症しています」と言います。2年前何をやってきたかという「花の乱」です。日野富子さんに命をさしあげてかわりにガンをいただいた。でも生きています。一つの作品をやるには命を賭してやらなければ残って行くものにならないのだと今しみじみ感じます。

自分で言うの、変ですか？(笑い)
そちらで、静かにしてらっしゃる木田さんって、いま大変偉い方なんです、この作品が大河のプロデュースの第1回でまだ若かったです。もちろん私の方が年上です。

毎日毎日、「ご飯も食べさせてくれないで朝6時とか、7時とか皆が出勤する時間に、私は「はい、お疲れ」と言っただけで帰る。世の中、これなんなのと思うような、そんなスケジュールを平気で私たちにやらせたんです。(笑い)で、あるとき、私はあまりのスケジュールと待遇に「木田さん！しっかりとよ！」と、パーンと木田さんの頬をつたをぶつちやっした。富子が乗り移っていたのかしら。わたしあんなこととは思わなかった。そのとき村土さんはいませんでした。驚りたろうさんとか小林さんとか何人かいて、「僕もぶつてください」「僕も」と言った。(笑い)

今のわたしには「叩いてくれ」とは言わないうでしよう。あの頃は、少しは色香が残っていました。それほどに、がんばりました。ねえ、木田さん。

木田 一応リーズナブルなスケジュールを作りますが、内容がそう簡単に振れる内容じゃないのです。市川さんの台本の一言一言、そこに仕掛けられている美術的な仕掛け、照明など、「もつそのくらいでいいよ。撮って」と言いたかったのですが、若くてそう言えなくて、本当に申し訳ありません。

三田 (笑い) だから、こんな素晴らしい作品が出来たんですね。当時、みんな気が地上になかった。幽霊がNHKに出たとか、混乱の極みの中でやっていました。他の俳優さんたちも凄かった。

渡辺 台本の中で、これだけ古語を含んだ難しい漢文調の台詞を完璧に演じる役者さんがたくさん集まっている。それは気が抜けない。一種の狂気の中での進めなかったのでしょ

うね。

三田 代々木公園を散歩しました。
木田 深夜ですね。深夜に怪しい一団が公園を散歩している。

三田 どこか、スタジオの外の空気に触れないとおかしくなっちゃう。「どこかに連れてって」と言っただけで、代々木公園を徒党を組んで散歩して、帰ってまた続きを撮る。

美術も素晴らしい。あれに使うお金は何と言うんですか？
渡辺 受信料です。

三田 そう、皆さんの受信料で凄く贅沢な、見たことがないような美術が毎回できた。
渡辺 それでは、アリアの第2弾として、富子と義政の最後のシーンを見ていただきます。このドラマは夫婦の物語として終わります。

義政が死ぬ頃、富子が「あなたがいたからこそ私がある」と言ったという記録があったそうです。市川さんはそれを見て、ドラマの最後にしてしようと決め、それで突っ走れた。それを目標にずっと書いてきた、と言っています。このドラマ、最後の義政と富子の場面です。

—映像・富子と義政の道行

義政 「夫婦になって35年。参内、猿楽見物あわせて四十九たび、共に出かけた。あと一回で五十回。五十回目の最後の旅に出ようではないか。」

富子 「お体に障りませぬか。」

義政 「妻が一緒じゃ。心配は要らぬ。」

富子 「この橋を渡ればもうそこが洛外でございます。」

義政 「ここへ来る間にも、さまざまな人行き違ったな。誰一人わしらのことを気がつく

者はなかった。」

富子 「私は大御堂所のお面を外して参りました。」

義政 「わしも大御所の義政は東山山荘に置いてきた。当人にその気がないのだから、人が気がつかないのも道理だな。」

富子 「何だか舞台を降りて素顔に戻った猿楽師のような晴れ晴れとした心持でございませぬ。」

義政 「こんな気軽な思いは初めてだ。」

富子 「あら。風花が。」

突然義政突っ伏して苦しむ。
義政 少々疲れただけだ。少し休んでいこう。」

富子 「急ぐ旅でもございませぬ。ゆるりと参りましょう」
富子、義政を支えながら、雪の中でわらべ歌を歌っている。

やがて二人は橋桁にもたれて雪の中うずくまる。
旅人が通りかかり
「お前さん方、そんなところで寒くはないかね。」

富子 「ありがとうございます。亭主が歩き疲れたと申しておりますので、どうぞご心配なく。」

旅人 「それならいいが。仲睦まじい夫婦じゃ。」

富子 (義政に) 「少し休めば、目をさましてくだされよ。——こなた様が風なら、私は風に乘って舞う花びら。思えば、こなた様あつての私…」

ナレーション・
春まだ浅い延徳2年正月7日、慈照院こと

足利義政公が55歳を一期としてこの世を去って行かれました。それから6日後の13日、

富子は剃髪して一位の尼となり大御所様の位牌とともに東山山荘に移り住む決意を固めました。――



渡辺 紘史氏

村上 佑二氏

村上 こうしているのと、ここに市川さんがいないことが最大の悲しみです。市川さんがいればもつと奥まで話が進んだと思います。

「花の乱」の根本的な構造は家督争いです。斯波家、畠山家は戦争までして家督相統を争っている。それは將軍家も同じで、あつちをみてもこつちをみても家督の争いで、それが応仁の乱の始まりです。家督相統の争いが一段落すると富子と義政はもう要らない者となり、世代交代が完了し、戦国時代を迎える。戦国時代を準備したのが室町末期でした。

ドラマをみると市川さんの台詞には心の中をじつと覗き込む深みがあり、それを演じる役者は相当な力がなければできない。先ほども言いましたが、三田さん、京さん、錦之助さんなど凄い役者さんがいて、我々演出人もその方たちに教わるが多かった。手を引

つ張られながらやつたという実感です。戦争はいつの時代もエゴイズムの塊です。その時代に生きた富子は深い煩悩な闇を抱えて生きている。そんなことを市川さんは繰り返して言っていましたし、それを伝える長い台詞を書ける脚本家はなかなかいません。オリジナルで室町時代を書ける脚本家はもうほとんどいない。市川さんは、凄い力でこれをまとめあげた。いまここであらためて感謝を述べたいと思います。

渡辺 ありがとうございます。あと5分くらい時間があります。もう一度聞きます。これだけのものが何故当たらなかったのでしょうか？

村上 私がやると当たらないのです。(笑) **渡辺** 放送された1994年は松本サリン事件があり、暗い年でした。

村上 翌年の正月は阪神淡路大震災、そして3月に地下鉄サリン事件です。バブルの時代は終わり、失われた20年という世の中が沈んだ時代です。それが作品と重なっています。市川さんも当然それは意識していた。大河ドラマはただ歴史を述べるのではなく物語です。ヒストリーにはストーリーが含まれている。事実を調べ探求して行くなかで物語が生まれてくる。そこが私たちが狙っている歴史ドラマです。

木田 分かり易く作ろうと出演者もスタッフも考えていなかった。こういうものを描きたいという気持ちだけなんです。キャストイングはふつう「あのグループの、あのアイドルを入れる?」といった感じでやったりしますが、それでは描き切れないので実力のあ

る方に、いままでやつたことのないような役をやつて貰う。草刈正雄さんが日野富子のお兄さんの役をやっていますが、これこそ本当の悪者です。草刈さんはそんな悪者を演じるのは初めてです。草刈さんはじめ皆さんは、常にチャレンジで、三田さんには過酷なスケジュールを強いることになってしまいました。分かり易くて楽しいドラマも必要ですが、硬派というか、見る側の人も作る側と一緒にチャレンジの旅へ、知らない世界へ出て行ってもらうようなものも必要だと思います。

三枝 同感です。大河ドラマは「チャラク、なつちやいけませんね。僕は「デイズニー化」と言っていますが、デイズニーが世界中をチャラクした。デイズニーは嘘を作る。醜い獣と結婚しても結末はわかっているから皆見に行く。初めから最後まで汚い手を使つてたま

している。見る人はあれが自分の幸せにつながるという幻想を見に行っているのです。いまはサクセスストーリーでないと作らない。大河もそうやってきたようです。NHKは分かり易く作る必要はないと思います。視聴者を無視しろとは言いませんが、無視できる位置にNHKはいます。民放は視聴率をとる義務があるでしょうが、NHKにはいいものを作る義務がある。難しくてもいいからいいものを、というのはNHKにしか望めないと思は

思う。いいものを作つてもらうために僕たちはお金を払うんです。大河ドラマは正統であるべきです。今は、面白ければいいのかと反省する時期だと思います。21世紀はただ面白いのでなく、深く面白くものを作らなければ、ドラマはなくなつてしまう。ドラマがなくなるし、もう1回見

ようというものがなくなる。心配です。(拍手) **三田** 私は女優としてあとどれだけあるかと思いません。俳優としては、おばあさんはおばあさんとして登場することができるので、素材として何かの役に出会えば出来ますが、「花の乱」は私のエネルギーがあふれているいいころでした。まだ命があつて、いろんな乱を乗り越えて、村上さんやスタッフの皆さんに三田佳子をもう一度使つてみたいと思われような役者として残つていきたいと思いません。それは思っただけで、現実には力尽きてよろよろするかもしれません。しかし今日みて、もう一度奮起したいと思いました。(拍手)

渡辺 最後になりますが、市川さんがこのドラマが放送された時期にこんなことを書いています。今のテレビドラマは視聴者のレベルを相当低いところに置いている。ドラマはバーゲンセールじゃない。安くすればどんどん品物がさげるといって、どこかの電気店の社長がやつているような数字取りにドラマが走っている。大河ドラマまでがそこに流されて行つてしまうという、安売りで点数を稼ぐようなドラマ作りは断固したくない。やはり歴史ドラマはその内容が持っている娯楽性と同時に、歴史の格調というものが、大袈裟に言えば民族の誇りと言つていいと思えますが、究極的には個々の誇りにつながる姿勢を貫きたい。演じる人も、ドラマの作り手も自分は「花の乱」に関わつたと、誇りに思える脚本を書き続けたい。それが脚本家にできる唯一のことだと思つてます。(拍手)

皆さんから質問を受ける予定でしたが、時間がなくなりました。これで終わります。ありがとうございます。

第9回ラジオ聞き酒の会 実施報告

報告者 永田俊和

日時 2018年10月10日(水)

会場 TOKYO FM 第4スタジオ

司会 三原治(放送人の会理事)

出演 延江浩(TFMエグゼクティブプラン
ー)

参加者 15人

聴取番組；「村上RADIO〜RUN&SONGS」(放送日時8月5日(日))

番組内容；「村上春樹が走っている時に聴いている音楽」ラジオ初登場の作家村上春樹が、自ら選んだ曲をかけながら、音楽への愛と、豊かな知識を中心に走ること、創作について等を語る。

あらかじめリスナーから募集した質問を坂本美雨が紹介し村上が答えるコーナーも。

番組聴取終了後、まずは当日参加者の自己紹介を兼ねて感想を語った。

A 自然体で話しているが、そうできる環境作りを良い話が引き出せる工夫がなされていた。60〜70年代の名曲をそのままではなくジャズバージョンやクラシック風などひとひねりを加えた選曲が今を感じさせた。

B 昨年延江さんには「言の葉の海に漣ぎ出して」で放送人グランプリの賞も取っていたのだが、今日の番組も面白い。これからのラジオ番組は教養と娯楽の両方の要素を持つことが必要ではないかと思ひながら聴いた。

C 今どきの音楽番組は音楽が重要視されていないが、フルでかけるのが良い音楽番組かというところ、そうではないかと思ひが伝わってくるのが大事だと思う。

その意味で本当に楽しませてもらった。

D かつて村上さんの「風の歌を聞け」を読んだとき、村上さんに出てもらってそのまま音楽番組ができるのではないかと思ひたことがあった。村上さんがレギュラーのDJをやれば「中高年の星」になるのでは。

E 延江さんは本当に気になる作品を次々発表してくる。企画力がある。時代性、日性をとらえた洗練された発想力がある。

司会 ここからは質疑応答とする。

村上春樹さんとの出会いはどこから？

延江 今年1月に知り合いの新潮社の編集者から「もしかししたら村上春樹さんがラジオに出られるかもしれない」と言われた。その方は村上さんとすごく親しい関係の方なので、ひよつとしたらと思ひ、スタッフを集めて週に1回程度村上作品の「輪読会」をしていたら、4月にお会いできた、皇居をジョギングする人が見えるスタジオに、ターンテーブルと、村上さんが初めて買ったというレコードなどを置いておき案内した。すると村上さんが「これです、ホレス・シルバー」と言っていて、初めて女の子とレコードを買いに行く話を始めた。

また、番組をやるという確約は戴いていなかったが12〜3分、私が聞き役で録音し、私の声だけ消して番組風にしてプレゼントした。そこからぐいぐい話が進んで、音楽番組はこういうものかなと分かっていただいて、

やるとしたらまず「RUN&SONGS」だろうということになった。

司会 初めての出会いでそこまで話が進んだ？

延江 テレビ、ラジオでも絶対声は出さない

ことで有名だったので、まだ半信半疑だった。録音をプレゼントしてから、やるという

までは、そんなに時間はかからなかった。最初はいろんな話をして、例えばIPODを7台持っていてそれに1000〜1700

入っている。その中から選曲するのはどうか。海外に行っても、まず行くのが中古レコード屋さんで、自宅には17000枚ぐら

いのレコードがあるとか。我々としては、あまり慣れた喋りより、村上さんのバックグラウンドが聞きたい。文学的な話とか、時代を

見る鋭いところとか。まんまりスナーに預ける形だとしたら、ラジオの原点の「一人語り」(が良い)ということを申し上げた。リスナーは村上さんの声しか聴きたくないのだから、アシスタントは止めましょう。

もう一つ、アメリカンスタイルのDJは自分が選曲して、聴きたい人に聴かせるとい

うスタイルだから選曲もお願いしたいと。

司会 延江さんにとって村上春樹とはどんな存在？

延江 「風の歌を聞け」から始めて、時代の価値観を作った作家であり、私の若いときから追いかけてきた作家。一方で、会わない方が良いとも思っていた。

会ってしまふと現実になってしまふから。すごく繊細な方だろうと思っていた。ただ、ラジオは繊細な方のほうが良いだろうと。あま

り調子良く立て板に水という方じゃないだろうと思っていたら、そのとおりだった。

司会 村上作品に、30歳の女性がFMを聴いているようなシーンがあったり、明らかにFMっぽい方だ。

延江 村上さんの資料で読者とのQ&Aで

「ラジオはやらないのか」という質問に「ジェットストリーム」だったらやっても良い

か、と書いてあったのでリスナーだと分かった。山下達郎さんの番組を聴いているという話も入っていた。

司会 輪読会のメンバーは？

延江 いつも特番を作るチームを募集した。ただその時番組が実現するかどうかは分かっていなかったがラジオマンは読書が好きなので、輪読会は楽しそうにやっていた。

司会 構成台本はどれくらいの段階まで用意したのか。

延江 台本は曲順程度。収録では村上さんがしゃべって私と構成の小林が色々訊いた。私たちの話した部分は後で編集で抜いた。これが構成かな。原稿があると読んじやうかなと。

司会 全然、読んでいる感じはない。編集前、どれくらい回したのか。

延江 そんなにカットしていない。初回なのでなるべく多く聴かせようと思ひて。ちよつと饒舌かもしれない。最初の無音のところがすごく大事だったので、あえて音楽はのせないようにしたのと、「今晚は、村上春樹です」の「今晚は」と「村上春樹です」の間をちよつと延ばした。そのほうがリスナーがドキドキするので。

司会 流れはほとんど入れ替えていない。

延江 してないです。

司会 反響がすごかったとか。感想が13000通以上という。

延江 今、RADIKOで聴く人が多いが、この時間のシェアが83%以上。決して奇をてらった番組ではないのに。そんな数字をお持ちだった。ラジオならではのコンテンツはやっぱ強い。

RADIKOのタイムフリーで聴く率も高かった。また都内のあちこちで集まってノーベル賞の発表待ちで集まるような形でラジオを囲んで聴いたという。TVのニュースでも出ていた。

司会 村上春樹さんがラジオに出るといいうので新聞、雑誌もちろんネットも色々な取材があり、宣伝効果が上がった。特に仕掛けなくとも皆が寄ってきた。

延江 村上さんが出てこないのだから仕掛けようがない。

司会 収録後は村上さんはどうされた。

延江 放送前に試聴はした。この曲のノリとかリズムとか、もうちょっと変えようか、とかスタッフと一緒にやっていた。

内容は変えられないけど、すごく丁寧に作られる方だと思った。

司会 出来には満足されていた訳だ。

延江 番組のホームページも、WEBには村上さんのファンは一杯いるので、完璧なものを作った。

この後「村上ラジオ」を離れて「言の葉の海に漕ぎ出して」など延江氏の他の作品などについても質疑があったが字数の関係で省略させていただきます。その後、麹町の居酒屋にて懇親会を開く。(放送人の会理事)

放送で思い出すこと

入会の挨拶に代えて

木原 毅

このたび、「放送人の会」のメンバーに加えていただきました。よろしくお願ひします。1955年1月生まれ、1978年にTBSに入社。年端もいかない頃に視た村木良彦さん・萩元晴彦さんの『あなたは』に衝撃を受けドキュメンタリーの制作を志望していたのですが当然叶いません。まず最初はテレビCM部というところに配属されましたが、放送というものの仕組みを知るに貴重な一年でした。諸先輩から民間放送とはどういうものなのか、例えばなぜ編成が大切であるかなど教わりました。また放送という業態は独立不羈なものだという考えが共有されていることにも感銘を受けました。例えば、ナショナルクライアントといえども提供のCMで番組本編に出演するタレントを使うのは『視聴者なかがしろにするはしたくない行為である』など、営業も制作もいまでは考えられない矜持があったように思います。

さて入社2年目でラジオの現場に配属されました。以降20年余り、ラジオのほとんどのジャンルの番組ワイド、ドラマ、報道、スポーツ制作にたずさわることが出来ました。編成や営業も経験しましたが、番組作りでは現在でも番組表に名前のある素晴らしい出演者、パーソナリティの方々と一緒に仕事でできたことに感謝しています。ずいぶん叱られました。その50歳を期にラジオを離れ、いわ

ゆるデジタルビジネスの世界を少々泳ぎました。僕にはこの分野での金儲けは向いていないのではないかと感じ(早い話自分にそういう能力がなかったようです)、60歳を以て満期終了。その後、放送批評懇談会に誘われラジオ選奨委員を4期勤めました。現在は視聴者・聴取者としての日々を送っています。

「放送人の会」の大先輩方のように特筆するような仕事はしてこなかったなと思いがながら本稿を書いてみると(10月11日のことです)、ロシアのソユーズが打ち上げに失敗したというニュースが飛び込んで来まして、20数年前の出来事がよみがえりました。TBSが創立40周年の企画として放った「宇宙プロジェクト」、そのスタッフの末席にラジオの代表兼窓口(リエゾン)として参加していたときのお話です。

時は1990年、ソ連邦末期のモスクワです。宇宙総局との最初の全体打ち合わせでつくりするような事実が判明しました。それまでソ連では発射の際の秒読み、つまり「カウントダウン」といふものがなかったのです。驚くTBS側に先方はこう言います。『点火してロケットの推力が重力に優ったときに物理的な打ち上げの瞬間だ、なぜカウントダウンのといふものが必要なのか』なるほど！そうだったのか！今ならあくまで基礎技術を重んじるソ連と、打ち上げもエンターテインメントにしてしまうアメリカの違いと納得もするし、そこでもうひと企画作れたかもしれませぬ。しかし当時はそんな余裕はありませんでした。まず第一のミッションはスペースシャトルに先んじて初の日本人宇宙飛行士を誕生させることだったからです。

プロデューサーや技術のチーフは呆気にとられながらも『なんとかカウントダウンは出ないか』喰い下がります。電波の関係上ラジオに多くの放送時間(送信時間)が割り当てられていたので、僕もここは黙ってはいられません。『日本人の多くがイメージする打ち上げの見せ場はカウントダウンであること、いわんや実況で聞かせるラジオにとつてそれがいかに大切なものか』など思うままに申し添えました。通訳は故・米原万里さんだったと記憶しています。果たしてカウントダウンは検討項目となり、幾日か経って日本側がそこまで言うのならアメリカ風のカウントダウンとやらをやってみようということに相成りました。

おそらくこの時の交渉の結果で彼の国でもカウントダウンが標準になっていったようです。その証拠に前述した先日の打ち上げ失敗のニュース(NASA配信の映像でしたが)では、きちんと画面にカウントダウンの数字が表示されていました。そのニュースに接しながらまさに空をつかむような交渉に汗をかいたことが懐かしく思い出された次第です。それにしてもです。打ち上げ失敗にかかわらず宇宙飛行士を無事に回収できるロシアの旧ソ連時代からの基礎技術の積み重ねは侮れない、基本というのはいつの時代でも大切なんだなと改めて気づかせてくれました。そんなわけで「放送人の会」でも番組の基本とは何かということを念頭に置いていきたいと思っております。(TBS出身)

わが自伝

くまだはもうなり、もうはまたなり

吉村育夫（松尾幸一）

わたしは1930年生まれである。したがってすでに80歳の半ばを超えている。

下町は築地に生まれた。稼業は魚河岸で父親は仲買店「尾啓」の店員だった。競りが始まる5時の予鈴が風向きによつてはかすかに聴こえたりする。

父親は3時起きで海幸橋を渡り、魚河岸入りのだ。だから一家揃つて朝食というわけにはいかない。

魚河岸は日本橋玉町界限にあったのだが関東大震災で焼け、築地に移転、同時にわが家も築地に居をかまえたという。案内のように仲買店は扱う魚によつて特化される。父親の店は鮭鱒（けいそん）専門だから買付けで北海道出張が多く不在がちだった。魚臭い匂いが染みこんだわが家が父親の存在をかすかに示していた。

その魚河岸も築地から豊洲に移転でテレビは連日その模様を報じていたが、築地魚河岸の風情と「場外」の活気と人情は必ずや残るにちがいない。

ところで小学生時代の友人らはサラリーマン家庭が大半だった。事務所がある銀座や丸の内、内幸町などに徒歩で行けるから下町住まいの新中間層も当時は下町の長屋に多く住んでいた。植木等の唄う「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだー」じゃないが、ハイカラなライフスタイルが容赦しに垣間見えた。なんとなく時代遅れのわが家の生活様式が子供（ころ）うとうとましく映るのだ。理由なき劣

等感にさいなまれる年少時代が終わると突如として時代が大変わりした。戦争である。

昭和12年の支那事変、宣戦布告なき戦争は「事変」だった。それは大東亜戦争（国際的には太平洋戦争）に拡大し、8・15の敗戦まで続いた。

そして昭和から平成へ。年号は近くなつてしまふ？昭和とは何だったのか。考えてみると私の半生はすつぽり「昭和」という時代につつみこまれている。

さて、どこまで生き、どこまで生かされるのか、またはもうなり、もうはまたなり。

こうなつたら百歳まで「やけ生き」して世の中の悲喜劇ぶりを眺めてみることにしますか。（放送人の会特別顧問）

「放送人の会・懇親忘年会」のお知らせ

日時 2018年12月15日（土） 18時30分～20時30分
場所 BACCHUS（バカス） 表参道
港区北青山3-8-12 TEL: 03-5468-7750
会費 お一人様5,000円（当日、会場にていただきます）
詳しくは別紙お知らせ（この会報と一緒にお届けしています）をご覧ください。
ご出席の方は、11月30日（金）までに事務局あてご連絡をお願いします。（事務局：千葉、逸見、須齋）

良き友が一人逝つてしまつた

前川英樹



西川章。TBSでは一期下だったが年齢は同じだ。喜寿だ。個人的に特別に深い付き合いがあったわけではないが、お互いにどことなく波長が合った。穏やかで、激したことも慌てたこともなく、何事もサラッとこなしていた。インテリジェンスとシャイとが絶妙にブレンドされていた。

若いころ、番組で一緒になった時に、とあるプロデューサーが西川と前川を間違えて呼ぶことが何度もあった。「あの人は、眼鏡をかけていて名前に川がつくと区別が出来ないんだ」と二人で笑った。TBSが日比谷スタジオという外の環境で番組制作を始めた時の担当者で、「イカ天」（イカスバンド天国）を、遊び心のノリで楽しんでいた。

制作から編成へ、そして社内のことでもどこにいても、西川章は西川章だった。

組合役員をやっていたこともあるが、組織中央にありがちな統制を好まず、TBSの自在な空気を大切にしていた。闘争委員会批判の文書を持つて行ったときに、「機関紙に載せるのは無理だけど、印刷しちゃいましょう」と言つて掲示板に張り出しまでしてくれた。TBS闘争で不当配転された故村木良彦氏の「配転後1年」というインタビュー記事を、

組合速報に書いたのも彼のはずだ。

徳島出身で、番組で阿波踊りが登場した時にその指導をしたことがあって、「踊りは腰です」と言つていた。ゴルフの名手でスコットランド・ツアーを企画して、仲間を連れて行ったこともある。

ある時期から俳句の世界入り、句会を主催し阿舟と号していた。阿波の阿と、魯舟を漕ぐのが得意だと言つていたので、その舟とで阿舟だったのだろう。

長い間放送人の会の理事、監事を務め、放送人句会のチーフだった。放送人の会の総会で「会の財政が厳しいのに、句会は必要か」という質問があった。総務委員長の私が、「他の句会と違つて、放送業界用語を話題にするところに特色がある」と答えたら、嬉しそうに「それそれ、それですよ、フフフ・・・」と笑つていた。

庭の木に止まり遊ぶや初雀
今年の年賀状の一句。
寂しいなあ……

訃報に接して短いメッセージを書いた。ここでその文章を結ぼうと思つていたのだが、通夜を訪れると斎場の入り口に色紙が飾つてある。そこに一句。

兜虫よくぞ我家を選びたる 阿舟
ご家族が選んだのだろうか。思うに、本人が気に入つていた句なのだと推測する。いい友だった。

放送人句会の講師星野高志氏 「悼」（斎場掲示）

思い出に終わりはなくて秋深む
行秋や鳴門の渦も滞となる
それにしても、寂しいなあ……。

第70回放送人句会

平成30年8月2日(木) 於 赤坂・麦屋

出席 星野高士 伊藤視郎 西川阿舟

林備後 荻野慶人 中村フミ 佐々木光野

深尾一化 近藤久二 以上9名

不在投句 鶴橋康夫

兼題 中元 いさぎ(鶏魚) 椰子

テレビ(業界用語)

「星野高士特選」

夕暮れの風にいさぎと白ワイン
見えぬ糸しばしまつはるお中元
いさぎ焼く肉を好まぬ母なれば
夏瘦せし夜毎わたしを抱くテレビ
いっさきかいさきか論じ塩で焼く

盆礼の主や若き未亡人

お中元送れば先方からも来る

椰子の実も我も一人をいとおしむ

「星野高士選」

付度の程の良し悪し盆見舞
八月のテレビ戦争ばかりかな
磯宿に友と鶏魚と酒すすむ
椰子の木に凭れウクレレハワイの娘
テレビで知る台風十二号の動き

野分中テレビ頼りの夜半かな

スーさんとハマちゃん誘ふいさきかな

敗戦日テレビの中の空の色

鶏魚釣り当てる外れて魚屋へ

枝豆の殻に混ぜ込むテレビかな

秋近し隣も四Kテレビ買ふ

波を踏み椰子の実一つ口ずさむ
中元や三人姉妹の老いはまだ
いさぎ釣る磯に寄りつつ離れつつ
老女たり椰子のふもとのワンピース
口あけはいさきの作りのみなれど
誕生日祝ひ中元兼ね子より
いくらでも椰子の実積めるオートバイ
炎暑なりテレビもともに燃えてをる
二十四匹釣りたいさきをどうしよう
椰子の木に戦地重ぬる父の逝く
端居してスマホに見入るテレビかな
月の夜の椰子の木陰の逢瀬かな
中元の西京漬けのバックかな
中元は貰いっぱなしテレビ局
逢はざるに友牢固たる御中元

「會員互選」

蹴球が夏の夜揺さぶるテレビ力
お中元昔は持参と母は言ふ
五輪後は微緑の秋かテレビ界
止め腕は安房のイサキの潮汁
朝八時隣のテレビも原爆忌
八月やテレビは語り部戦争の
憧れのハワイ航路は椰子並木
椰子の樹の森に地雷と不発弾
椰子マンゴーパイヤ積みて独木舟来る

ふと淋し嫁せる娘よりの初中元

今年また中元贈る友の減り

つがめ 円らな腫罪無きイサキ焼く夕餉

無念ならむ椰子が墓標となれる時代

久二

椰子見上げその生終へし人数多
夏座敷テレビの分際下着脱ぐ
「選者吟」

星野 高士

医者の手のおに伸ばしたるお中元

中元と共に小ぶりな和菓子かな

中元や心もとなき箸使ひ

夜の椰子に困まれてあて恋模様

テレビ局前の西日は夕べにも

窯焼きのピザにいさきの切り身あり

テレビ局前にタクシー待つ炎暑

第71回放送人句会

平成30年10月10日(水) 於 赤坂・麦屋

出席 伊藤視郎 林備後 荻野慶人

中村フミ 佐々木光野 近藤久二 深尾一化

以上7名

兼題 案山子 吊し柿鯨 奈落(業界用語)

熟年と言はれ見上ぐる吊し柿
音たてぬことのしあはせ鯨日和
うそ寒や奈落でひとり出番待つ
吊し柿鯨手皺握ぎ鯨が食へ
奈落より見上げたる世の後の月
舞台はね奈落の隅に潜む秋

あかぎれ 輝の踵奈落へ降りて来る

☆ 近江の田京の古着の案山子かな

あぶ 溢れ蚊の奈落底より生還す

かじか 悴んで奈落で煙草隠れ喫み

視郎

光野

視郎

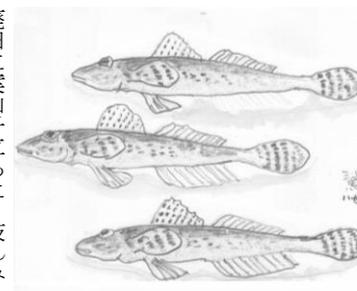
光野

視郎

光野

光野

光野



廃田に案山子立ちたり岐れみち

年寄と案山子が守る二反二畝

ダボハゼと汚名良しきプロデューサー

世につれて野良着に案山子エレキ弾く

遠案山子道誘ひたる句友逝く

装ひも新たに案山子アトかな

友の夢奈落でゴルフ秋の宿

吊し柿干すを眺めてをる鳥

破れ案山子異常気象を生き延びて

揚げたての鯨の眼我を見つめたり

魚河岸や鯨天じゆつと揚げたてを

吊し柿夕焼け小焼けの鐘がなる

吊し柿軒先に火照る幼き日

原発の村の干し柿いと赤く

フクシマや復活したる吊し柿

次回放送人句会

○平成30年12月10日(月) 17時半頃から

投句締切18時半

○会場 赤坂・麦屋(納屋)

○兼題 数へ日 夜話 牡蠣

スポット(業界用語)

☆選者として星野高士氏が参加されます

会員名簿

2018.11.16 現在

【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋央里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道
 【え】江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野瞭 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐
 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金沢敏子 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 【き】北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美恵 北村充史 木下浩一 木村成忠 【く】工藤英博 久保志穂 隈部隆生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳
 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暎子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】崔銀姫 千葉邦彦
 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暎子 戸田桂太 外崎宏司 富沢一誠 豊原隆太郎 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村芙美子 中山和記 並木章
 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】信井文夫 延江浩
 【は】萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鏡一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根世世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

公開セミナー

第20回 放送人の世界

「右田千代〜人と作品〜」

日時・12月2日(日) 13時〜15時

場所・上智大学 6号館・101教室

講師・右田千代

聞き手・今野勉

主催・放送人の会 上智大学メディア・ジャー

ナリズム研究所

入場無料

【上映予定番組】

「隣人たちの戦争〜コンボ・ハイダルドウ

〜シイ通りの人々〜」(1999)

「被曝治療83日間の記録〜東海村臨界事故〜

(2001)

「日本海軍 400時間の証言 第2回 特攻

「やましき沈黙」(2009)

「きのこ雲の下で何が起きていたのか」(201

5)

他 部分上映あり。

【右田千代のプロフィール】

NHK放送総局・大型企画開発センター・エ

グゼクティブディレクター。

1965年東京生まれ。1988年NHK入

局。報道局、衛星放送実施本部、広島放送局な

どを経て現職。「クローズアップ現代」や「NH

Kスペシャル」などを企画制作。

芸術祭賞、ギャラクシー賞、モンテカルロ国

際テレビ映像祭賞など国内外で受賞多数。

2010年放送ワーマン賞受賞。

第16回 人気番組メモリー

きょうの料理

日時・12月8日(土) 13時半〜

場所・情文ホール

(横浜情報文化センター6階)

ゲスト 堀江ひろ子(料理研究家)

ほりえさわか(料理研究家)

後藤繁栄(「きょうの料理」司会)

大野敏明(元「きょうの料理」CP)

佐野朋弘(テキスト編集長)

司会 渡辺紘史(放送人の会)

●日本で最も歴史の長い料理番組。これま

で紹介した料理の数4万品、出演した料理

講師1200人。放送回数1万4千。テキ

スト売り上げ4億冊。今回は親子3代に渡

り番組講師を務める堀江ひろ子さん、さわ

こさん、ダジャレの司会でお馴染みの後藤

繁栄さんを迎えるのトーク。

編集後記

▼日韓中フォーラムに私は参加できず、執筆
 依頼、写真撮影などフォーラムに関する編集
 部の作業を深尾隆一さんに全部引き受けてい
 ただきました。多くの原稿が集まり、写真の
 ページができたのは深尾さんのおかげです▼
 名作の舞台裏「花の乱」の写真は藤田知久さ
 んの撮影です▼私はベトナム・カンボジアの
 演奏旅行で体調を崩し、目下禁酒中ですが、
 みなさんのご協力で会報発行に漕ぎつけまし
 た。ありがとうございます(視)